青年招へい事業

アジア・太平洋・アフリカ諸国

[交流レポート]

THE YOUTH FRIENDSHIP PROGRAMME

ASIA, PACIFIC AND AFRICA

[Report]

JICA LIBRARY
J 1125110 [5]

1995

国際協力事業団

Japan International Cooperation Agency

青招
JR
95－018

青年招へい事業 THE YOUTH FRIENDSHIP PROGRAMME 一九九五年

THE YOUTH FRIENDSHIP PROGRAMME

YOUTH INVITATION DIVISION
TRAINING AFFAIRS DEPARTMENT
JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION AGENCY

SHINJUKU MAYNDS TOWER,
1-1, YOYOGI 2-CHOME, SHIBUYA-KU, TOKYO 151 JAPAN
TEL: 03-5352-5402~3
©1996
NO PART OF THIS PUBLICATION MAY BE REPRODUCED
WITHOUT THE PRIOR PERMISSION OF PUBLISHER.

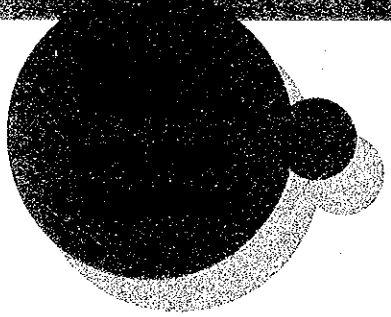
1125110[5]

信頼と友情への第一歩

ONE STEP TOWARD MUTUAL UNDERSTANDING AND FRIENDSHIP

平成7年度アジア・太平洋・アフリカ諸国青年招へい事業

Memorable scenes of the Youth Friendship Programme, 1995



国際協力事業団より歓迎のあいさつ
Welcome address from JICA

期待に胸ふくらませて
Participants full of expectation

真剣にあいさつを聞く参加青年
Listening to the speaker seriously

拍手を送る青年たち
Giving a big clapping of hands to the speaker

どんな1カ月になるのかしら？
What will our one-month stay be like?

共通プログラム
GENERAL ORIENTATION PROGRAMME

江戸東京博物館にて
Visiting Edo-Tokyo Museum

日本語学習にてホームステイの練習
Japanese language lesson for home stay

どこに行きましょうか。(体験的日本語学習)
Where shall we go?

熱心に講義を聞く青年
Listening to the lecture eagerly

武道館にてなぎなた体験
Experience of *naginata* at Budokan

分野別研修プログラム
SPECIALIZED PROGRAMME IN TOKYO

小学校訪問
Visiting an elementary school

みんなで記念撮影
Let's take commemorative photo, together.

工場見学
Visiting a factory

国会議事堂前にて記念撮影
Commemorative photo in front of the National Diet Building

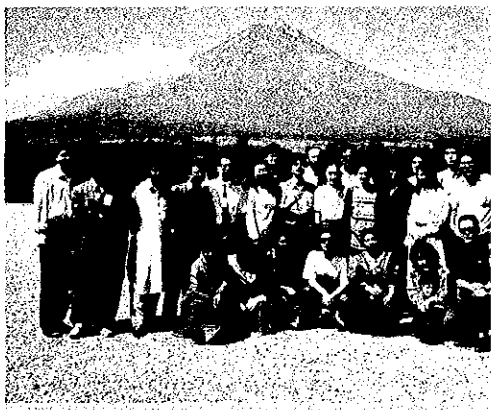
華道体験
Experience of Japanese flower arrangement

合宿セミナー

IN-HOUSE SEMINAR

お腹がいっぱいになったところで一枚
Group photo after a good meal

歌に言葉の壁はありません。
There's no language barrier in singing.



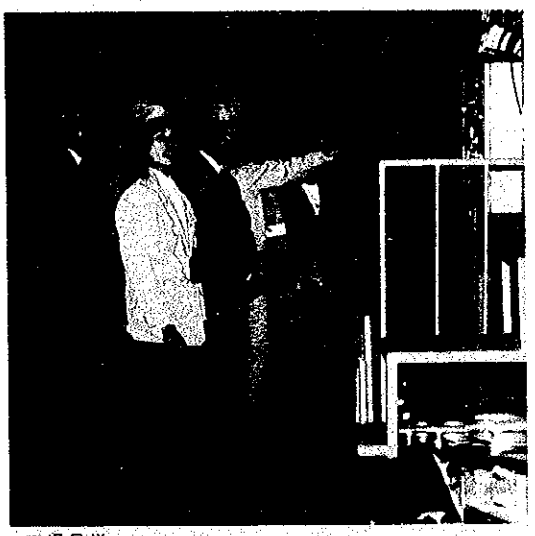
富士を背に
Taking a photo with beautiful Mt. Fuji in the backgr

スポーツ交流
Sports exchange

和やかななかにも真剣さが漂う討論
Serious Discussion in friendly mood

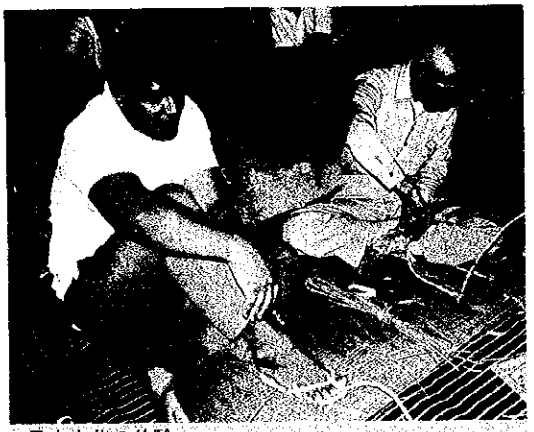
分野別地方プログラム

SPECIALIZED PROGRAMME IN DIFFERENT PREFECTURES



工場見学
Visiting a factory

笹かまぼこ作り体験
Making *sasakamaboko*; fish cake



日本文化の体験
Experience of Japanese culture

小学校を訪問
Visiting an elementary school

真剣な眼差し（土作り見学）
Eager to listen (Experience of soil preparation)

よく似合ってます。
We look nice, don't we?

ホームステイ

HOMESTAY

ホームステイ先の小学校にて
At elementary school near the host family

砂風呂(?)
At sand bath?

皆さん上手です。
Well done.

日本の風景をバックに
Taking a photo in a Japanese scenery

和やかな交流
Having an enjoyable time

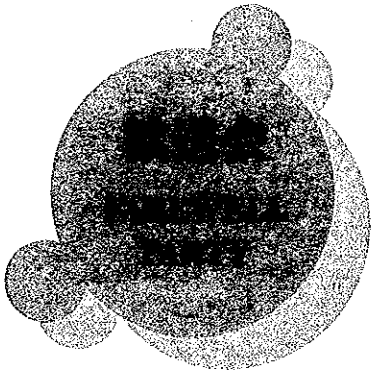
見学旅行
OBSERVATION TOUR

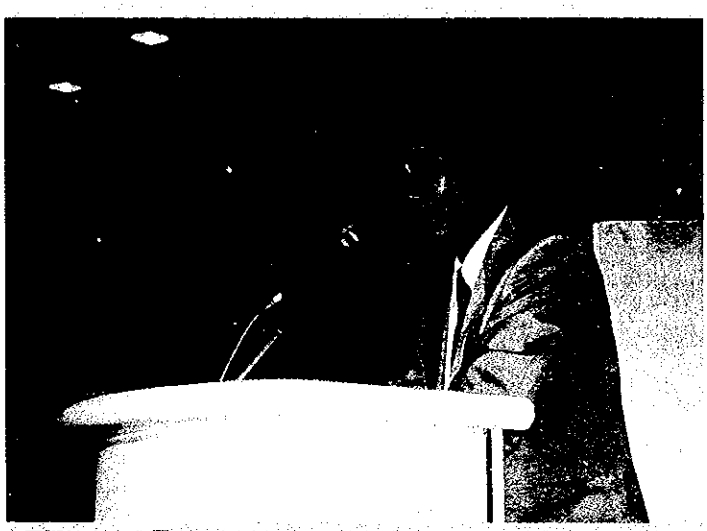
瀬戸大橋をバックに
Taking a photo with Seto-Ohashi Bridge

清水寺の入口にて
At the entrance of Kiyomizu Temple

晴れ渡った空と青年の笑顔
Blue sky and smiling face

金閣寺にて
At Kinkaku-ji





国際協力事業団よりあいさつ
Farewell address from JICA

招へい青年代表のあいさつ
Speech by the representative of the participants

友情の輪
Friendship

美しい民族衣装と歌声
Beautiful traditional costume and singing

乾杯！
Cheers!

青年招へい事業

THE YOUTH FRIENDSHIP PROGRAMME

日本語編・Japanese Version …… 3
英語編・English Version ……99

青年招へい事業

はじめに

「青年招へい事業」は、国際協力事業団（JICA）が開発途上国を対象に実施する技術協力の一環として、アセアンをはじめ、アジア、太平洋、アフリカ諸国などから、将来の国造りを担う青年を、専門分野別に１カ月間招へいし、それぞれの分野について学ぶとともに、ホームステイ受入家族などとの幅広い交流を通じて相互理解を深め、信頼と友情を築くことを目的としています。

昭和59年度より平成６年度までの11年間で、日本を訪問したアジア・太平洋・アフリカ諸国の青年は11,921名に達しました。招へい国は当初アセアン６カ国でしたが、現在では太平洋諸国、ミャンマー、中国、韓国、南西アジア諸国、モンゴル、アフリカ諸国、およびカンボディア、ラオス、ヴィエトナムのインドシナ３国が加わり大きな広がりをもってまいりました。

そして、本事業開始以来12年目を迎えた平成７年度も、1,533名の青年の受け入れを無事終了することができました。これはひとえに、関係各方面の皆様のご協力と温かいご支援によるものと、心からお礼申し上げます。

本報告書は、招へい青年、合宿セミナーに参加した日本青年およびホームステイを引き受けていただいた全国の家庭の皆様から寄せられた感想文を中心に、招へい青年の１カ月の滞在記録をとりまとめたものです。本報告書が本事業のさらなる発展の指針となり、また皆様の良き思い出の一助となれば幸いです。

なお、本報告書は今年度の全招へい青年および各国の関係者にも送付させていただく予定です。

最後となりましたが、心温まるご感想、ご意見をお寄せいただいた皆様ならびに関係者の方々に重ねて厚くお礼申し上げますとともに、「青年招へい事業」がさらに有意義な交流プログラムとなりますよう、今後ともご支援、ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

平成８年３月

国際協力事業団
研修事業部
部長　庵原　宏義

目　　次

はじめに

1．青年招へい事業—アジア・太平洋・アフリカ諸国—

(1) 計画の概要……9

(2) 平成7年度青年招へい実績一覧……14

(3) 青年招へい事業国別年度別受け入れ実績……16

2．招へい青年の印象

アジア

ブルネイ……19

インドネシア……21

マレイシア……25

フィリピン……32

シンガポール……39

タイ……45

バングラデシュ……52

ブータン……52

インド……53

モルディヴ……54

ネパール……55

パキスタン……56

スリ・ランカ……57

モンゴル……58

ミャンマー……59

カンボディア……60

ラオス……61

ヴィエトナム……62

太平洋諸国・地域

フィジー……66

パプア・ニューギニア……67

ソロモン諸島……69

西サモア……70

アフリカ

モロッコ……72

スワジランド……74

トーゴー……75

ウガンダ……76

3．合宿セミナー参加日本青年の声……77

4．ホストファミリーの思い出……89

英語編……99

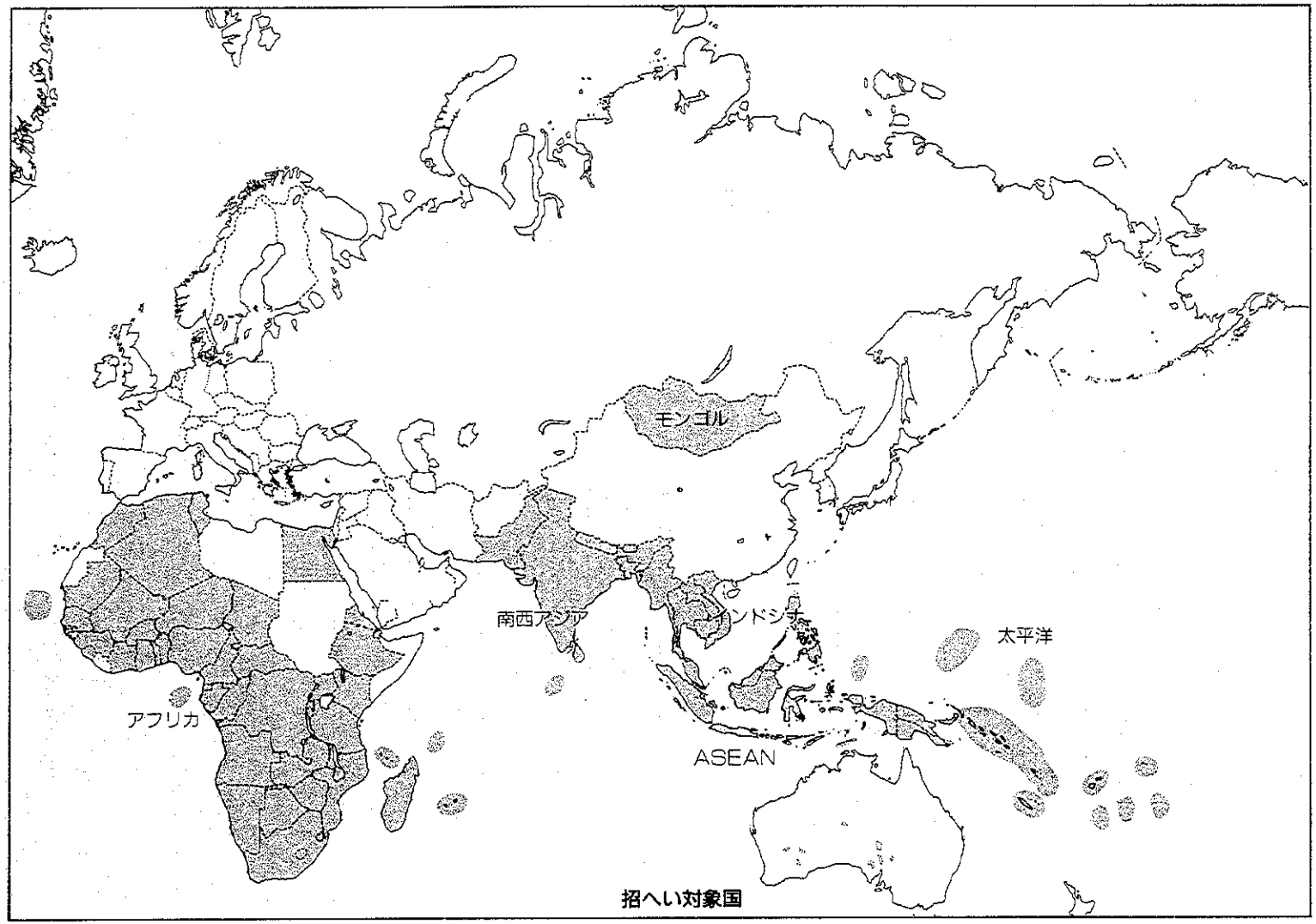
連絡先

1．青年招へい事業実施協力団体等連絡先……202

2．ASEAN同窓会連絡先……204

3．JICA関係機関連絡先……205

〈招へい青年名簿〉



招へい対象国

1. 青年招へい事業
アジア・太平洋・アフリカ諸国

(1) 計画の概要

1) 目　的

青年招へい事業は国際協力事業団（JICA）が開発途上国を対象に実施する技術協力の一環として、これら諸国の未来の国造りを担う青年を専門分野別に１カ月間わが国に招へいし、それぞれの分野について学ぶとともに、これらの参加青年が日本の同世代の青年との交流を通じ相互理解を深め真の友情と信頼を培うことを目的とする。

2) 招へい事業

(a) 実施方法

a） 招へい人数

平成７年度は、ASEAN６カ国より各150名（ブルネイは50名）の800名、ミャンマー20名、パプア・ニューギニア、フィジーをはじめとする太平洋14カ国・地域より計80名、インド、パキスタンをはじめとする南西アジア７カ国より100名、モンゴルより10名、アフリカ諸国44カ国・１国際機関より100名、ヴィエトナムより100名、カンボディアより30名、ラオスより20名の合計1,260名を招へいする。

b） 招へい対象者

下記分野における指導的立場にある18～35歳の青年。

ア． ASEAN諸国

(i) 国別グループ

経済Ａ（マレイシアは経済経営）：経済官庁公務員、貿易実務関係者、経済学専攻の学生等

経済Ｂ（マレイシアは中小企業）：中小企業等産業関連の青年労働者（マレイシアは産業関係の技術研究開発従事者も含む）

教育：教員、教育行政公務員、教育学専攻の学生、文化・スポーツ関係者

社会開発：青少年事業の活動者、地域振興・観光開発関係者、社会開発に従事する公務員等、社会学専攻の学生

（マレイシアは科学技術：科学技術開発関係公務員、科学技術開発分野専攻の学生）

農業（マレイシアは農業開発）：林業・水産を含む農業従事者、農業団体職員、農業関係公務員、農学専攻の学生等

(ii) 混成グループ

環境保全：環境行政公務員、環境保全関連実務者

社会福祉：社会福祉公務員、社会福祉学専攻の学生、社会奉仕関係者

保健医療：医師・看護婦等医療従事者、医学専攻の学生

報道：報道関係者

経済：エコノミスト、貿易実務関係者

教育：教員、教育学専攻の学生、教育関係者

イ．太平洋諸国・地域、南西アジア諸国、モンゴル

青年指導者：青少年活動者及び関係者、スポーツ・文化・社会奉仕等団体関係者

勤労青年：企業等勤労者、公務員、ジャーナリスト

公務員：他の分野に該当しない一般公務員

教員：教育機関教員、教育関係公務員

学生：大学生、大学院生、各種学校等の学生

ウ．アフリカ

教員：高等学校もしくは中学校の女性教員

公務員：経済開発関係公務員

エ．ミャンマー

教育：小中高教員、教育省の教員養成校の講師

オ．ヴィエトナム

公務員：司法、立法、行政、特に地方公務員を含む公共サービスや国際協力に従事する者

経済：工業・建設・商業・雇用サービス・観光・交通・資源開発・環境等の分野に従事する者

農業：農林業従事者、農林業団体職員、農林業関係公務員、農学・林学専攻の学生等

教育：小・中・高等学校・職業訓練校の教員、教育行政・社会福祉・社会教育に従事する公務員、教育・社会福祉・伝統文化等の保護・報道分野の研究者や学生

カ．カンボディア

教育：小中高教員、教育関係公務員

キ．ラオス

教育：小中高教員、教育関係公務員、教育専攻の学生

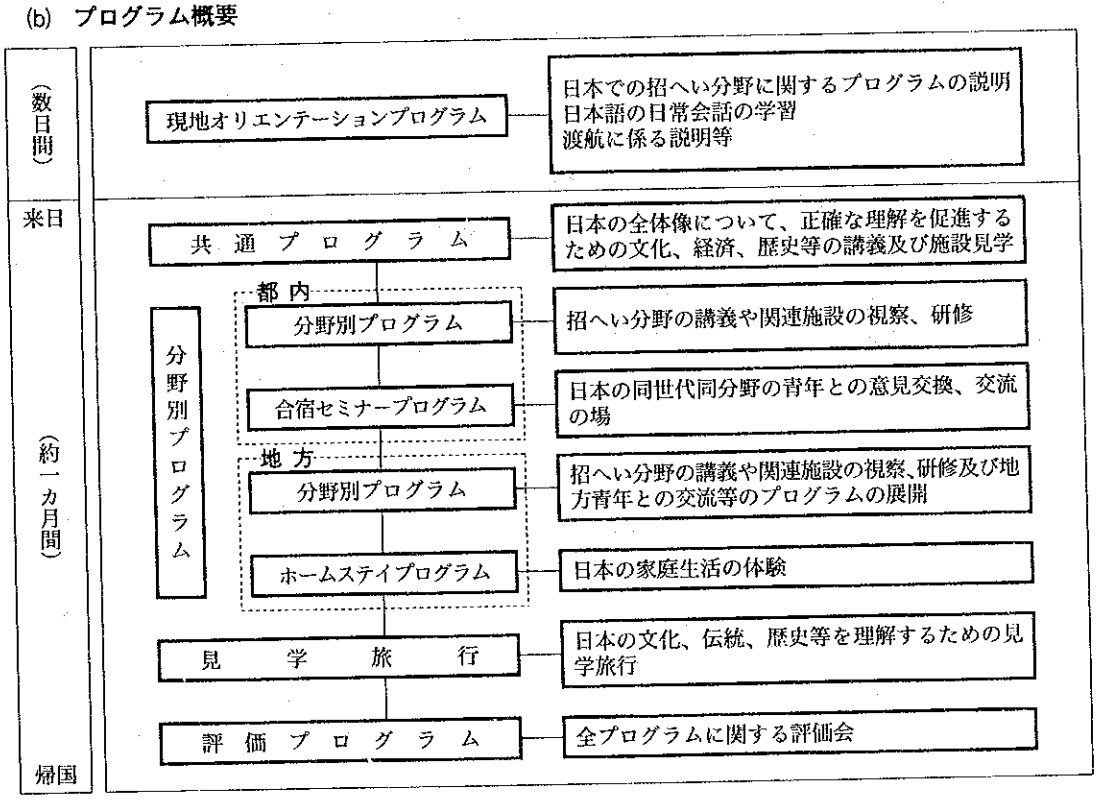
c）招へい期間

約１カ月。出発前、数日間の現地オリエンテーションプログラムを実施。

d）受け入れ時期

1995年５月中旬～1996年２月上旬

(b) プログラム概要



3) アフターケアー事業

「青年招へい事業」により日本に招へいした青年が、帰国後も対日理解を増進し、日本の同世代の青年たちと友情を持続させるよう、青年の帰国後、以下のアフターケアー事業を実施している。

(a) **文献供与**

帰国青年に対し、日本でのプログラム内容をとりまとめた「交流報告書」や青年招へい事業広報誌"Dear Friends" などの送付を行い、帰国後も対日理解が継続されるよう、情報提供を実施している。

(b) **各国同窓会の設立**

各国の帰国青年によって構成される同窓会設立を促進し、同窓会名簿の作成、新規招へい青年の現地プログラムへの協力、帰国青年のための総会および会報作成等の活動を同窓会が主体的に実施するにあたり、所要経費負担をするなど側面的支援を行っている。ブルネイ、インドネシア、マレイシア、フィリピン、シンガポール及びタイではすでに同窓会が設立され、パプア・ニューギニアその他の太平洋諸国においては、準備中あるいはその機運が盛り上がっている。

(c) **同窓会交流連絡会**

各国の同窓会の連携を図ることによって、各国同窓会活動を充実し、日本の招へい事業の効果を継続的、多角的に発展させるため、各国同窓会が一堂に会して交流連絡会を開催するにあたり、日本側は旅費等の経費面で支援するとともに、日本側代表者を派遣し、各国代表者との包括的な意見交換等を行っ

ている。なお交流連絡会は、現在のところ、同窓会が設立されているASEAN諸国間で行われており、1988年に第1回連絡会がインドネシアで開催され、その後、毎年各国持ち回りで実施されている。1995年度にはフィリピンで開催された。

(d) アフターケアー・チームの派遣

各国青年の招へいに中心的役割を果たした受入関係者である交流青年、ホストファミリー、関係機関担当者から構成される日本青年団を各国に派遣することによって、帰国青年の日本理解をフォローアップするとともに、受入関係者が各国の実態を把握することによって、より効果的なプログラム策定に役立てる。また、これらアフターケアー・チームの派遣により、片側通行であった交流事業を相互に発展・拡充させ、一層の信頼と友情を深める。今年度もASEAN諸国に5グループ24名が派遣された。

(2) 平成7年度青年招へい実績一覧

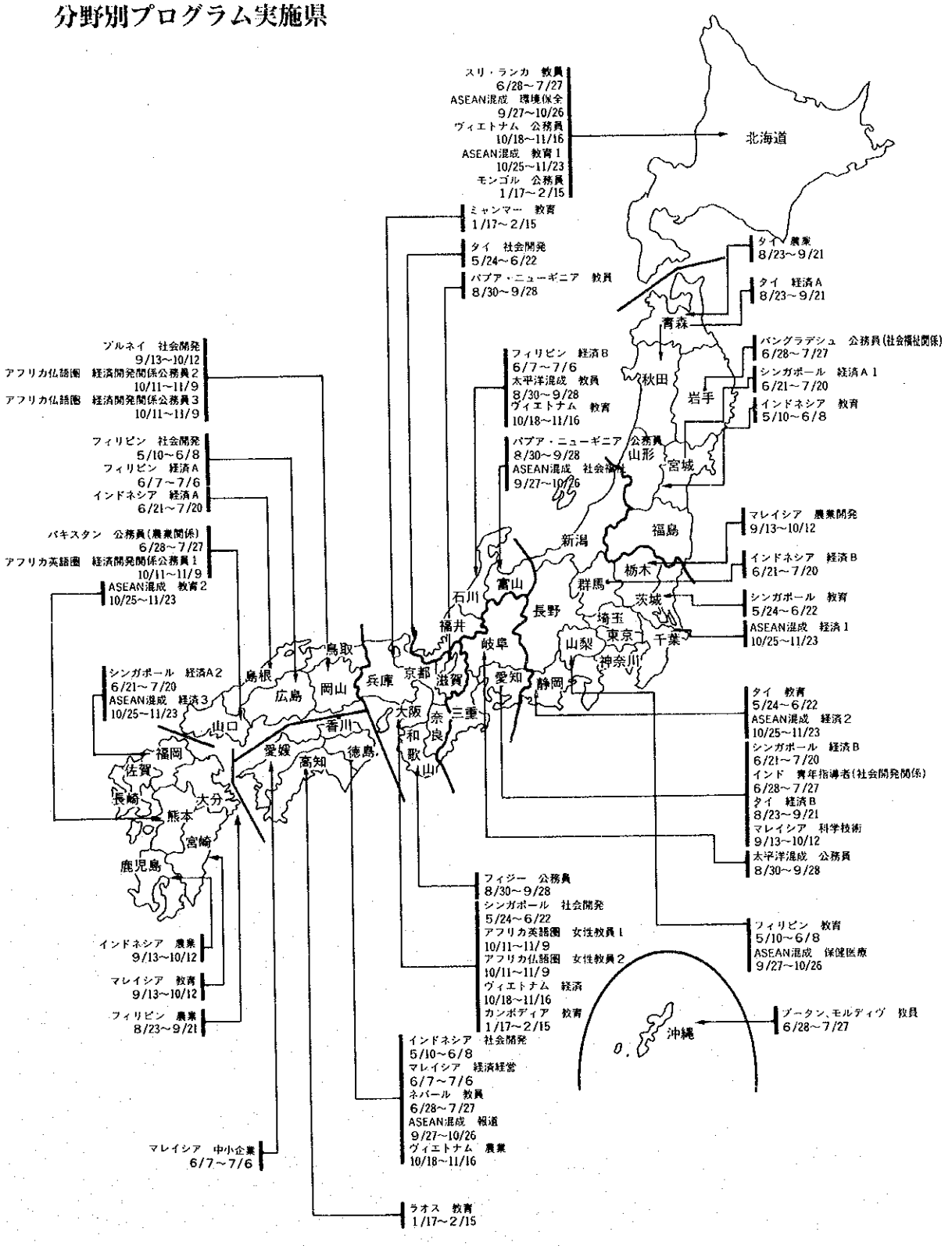
受入時期 陣・人数	国名	分野名	人数	実施協力団体	実施県	地方団体
5月10日～ 6月8日 1陣 94人	インドネシア	教育	22	青年海外協力協会	山形	山形県青年海外協力協会
	インドネシア	社会開発	25	勤労厚生協会	徳島	徳島県青年連合会
	フィリピン	教育	22	青少年育成国民会議	山梨	(社)青少年育成山梨県民会議
	フィリピン	社会開発	25	日本経済青年協議会	広島	(財)広島市国際交流協会
5月24日～ 6月22日 2陣 94人	シンガポール	教育	22	国際交流サービス協会	茨城	茨城県世界青少年コミュニケーションクラブ
	シンガポール	社会開発	25	日本友愛青年協会	大阪	友愛青年連盟大阪支部連合会
	タイ	教育	22	世界青少年交流協会	静岡	沼津国際交流協会
	タイ	社会開発	25	日本ユース・ホステル協会	京都	(財)京都ユース・ホステル協会
6月7日～ 7月6日 3陣 94人	マレイシア	経済経営	25	世界青少年交流協会	徳島	徳島県青年海外派遣の会
	マレイシア	中小企業	25	青年海外協力協会	愛媛	愛媛県青年海外協力協会
	フィリピン	経済A	20	ユースワーカー能力開発協会	広島	庄原市国際交流実行委員会
	フィリピン	経済B	24	日本国際協力センター	石川	小松市国際交流協会
6月21日～ 7月20日 4陣 110人	インドネシア	経済A	20	国際交流サービス協会	島根	島根県国際交流青友会
	インドネシア	経済B	24	勤労厚生協会	群馬	アセアン青年招へい事業館林市実行委員会
	シンガポール	経済A1	20	日本国際生活体験協会	宮城	(財)宮城県国際交流協会
	シンガポール	経済A2	24	日本ユース・ホステル協会	福岡	福岡県ユース・ホステル協会
	シンガポール	経済B	22	日本経済青年協議会	愛知	(財)豊橋市国際交流協会
6月28日～ 7月27日 5陣 93人	バングラデシュ	公務員 (社会福祉関係)	20	青年海外協力協会	岩手	(財)岩手県国際交流協会
	ブータン、モルディヴ	教員	10	ユースワーカー能力開発協会	沖縄	(財)沖縄県国際交流財団
	インド	青年指導者 (社会開発)	23	日本国際協力センター	愛知	(財)愛知県国際交流協会
	ネパール	教員	10	日本青年団協議会	徳島	徳島市国際交流協会
	パキスタン	公務員 (農業関係)	20	世界青少年交流協会	山口	世界青年徳山友の会
	スリ・ランカ	教員	10	青少年育成国民会議	北海道	滝川市国際交流協会
7月5日～ 8月3日 6陣 98人	韓国	青年指導者・ 公務員	25	国際交流サービス協会	新潟	(財)新潟県国際交流協会
	韓国	勤労青年 (技術系)	23	勤労厚生協会	埼玉	上尾市国際交流推進委員会
	韓国	教員 (養護学校)	25	日本ユース・ホステル協会	福井	(財)福井県国際交流協会
	韓国	学生 (理科系)	25	世界青少年交流協会	秋田	秋田世界青年友の会
8月23日～ 9月21日 7陣 94人	フィリピン	農業	25	全国農村青少年教育振興会	大分	(財)大分県海外協会
	タイ	農業	25	日本青年団協議会	青森	青森県青年海外協力協会
	タイ	経済A	20	日本経済青年協議会	秋田	(財)秋田県国際交流協会
	タイ	経済B	24	勤労厚生協会	愛知	ジャパンヤングサークル東海支部
8月30日～ 9月28日 8陣 78人	太平洋混成	公務員	22	青年海外協力協会	岐阜	飛騨高山国際協会
	太平洋混成	教員	14	日本ユース・ホステル協会	石川	石川県ユース・ホステル協会
	パプア・ニューギニア	公務員	10	世界青少年交流協会	富山	富山県世界青年友の会
	パプア・ニューギニア	教員	20	日本国際協力センター	滋賀	滋賀県青年団体連合会
	フィジー	公務員	12	青少年育成国民会議	和歌山	(社)和歌山県青少年育成協会
9月13日～ 10月12日 9陣 105人	インドネシア	農業	25	全国農村青少年教育振興会	鹿児島	(財)鹿児島県国際交流協会
	マレイシア	農業開発	16	青年海外協力協会	栃木	栃木県外国青年招へい事業実行委員会
	マレイシア	教育	25	ユースワーカー能力開発協会	宮崎	ユースワーカー能力開発協会宮崎県支部
	マレイシア	科学技術	25	豊川市国際交流協会	愛知	(財)豊川市国際交流協会
	ブルネイ	社会開発	14	日本国際生活体験協会	岡山	日本国際生活体験協会岡山地区委員会

受入時期 陣・人数	国　名	分野名	人数	実施協力団体	実施県	地方団体
9月27日～ 10月26日 10陣 113人	ASEAN混成	環境保全	30	日本経済青年協議会	北海道	網走市海外青年招へい事業実行委員会
	ASEAN混成	社会福祉	30	世界青少年交流協会	富　山	(財)とやま国際センター
	ASEAN混成	保健医療	30	国際看護交流協会	山　梨	(財)国際看護交流協会
	ASEAN混成	報道	23	日本国際協力センター	徳　島	徳島 新聞・放送実行委員会
10月11日～ 11月9日 11陣 97人	アフリカ					
	英語圏	女性教員1	22	大阪府国際交流財団	大　阪	(財)大阪府国際交流財団
	仏語圏	女性教員2	25	大阪府国際交流財団	大　阪	(財)大阪府国際交流財団
	英語圏	経済開発公務員1	24	国際交流サービス協会	山　口	山口県青年団体連絡協議会
	仏語圏	経済開発公務員2	12	青年海外協力協会	岡　山	津山とアジアを結ぶ会
	仏語圏	経済開発公務員3	14	世界青少年交流協会	岡　山	岡山県世界青年友の会
10月18日～ 11月16日 12陣 98人	ヴィエトナム	公務員	25	日本国際協力センター	北海道	とまこまい国際交流センター
	ヴィエトナム	経済	25	勤労厚生協会	大　阪	(財)太平洋人材交流センター
	ヴィエトナム	農業	24	全国農村青少年教育振興会	徳　島	徳島県国際農業協議会
	ヴィエトナム	教育	24	ユースワーカー能力開発協会	石　川	(財)石川県国際交流協会
10月25日～ 11月23日 13陣 88人	ASEAN混成	教育1	18	日本国際生活体験協会	北海道	(財)札幌国際プラザ
	ASEAN混成	教育2	18	日本友愛青年協会	熊　本	熊本県青年海外協力協会
	ASEAN混成	経済1	17	日本国際協力センター	千　葉	(財)千葉県国際交流協会
	ASEAN混成	経済2	17	日本ユース・ホステル協会	静　岡	(財)静岡県国際交流協会
	ASEAN混成	経済3	18	青少年育成国民会議	福　岡	(社)九州・山口経済連合会
11月8日～ 12月7日 14陣 98人	中国	青年指導者	25	日本青年団協議会	岡　山	(財)岡山県青年館
	中国	勤労青年	25	日本経済青年協議会	三　重	三重県連合青年団
	中国	公務員	23	国際交流サービス協会	長　崎	(財)長崎県国際交流協会
	中国	教員	25	日本ユネスコ協会連盟	福　島	福島ユネスコ協会
11月15日～ 12月14日 15陣 99人	中国	産業基盤整備	25	日本ユース・ホステル協会	鳥　取	とっとり青友会
	中国	経済開発	24	勤労厚生協会	愛　媛	(財)愛媛県国際交流協会
	中国	地域振興	25	世界青少年交流協会	香　川	香川県海外派遣友の会
	中国	人材育成	25	青少年育成国民会議	沖　縄	(社)沖縄県青少年育成県民会議
1月17日～ 2月15日 16陣 80人	カンボディア	教育	30	青少年育成国民会議	大　阪	大阪市青少年国際交流協議会
	ラオス	教育	20	国際交流サービス協会	高　知	(財)高知県国際交流協会
	ミャンマー	教育	20	世界青少年交流協会	兵　庫	(財)兵庫県青少年本部
	モンゴル	公務員	10	青年海外協力協会	北海道	青年海外協力隊北海道OB会道東支部
合　計	71グループ 1,533人	ASEAN 6カ国（792）、太平洋13カ国・地域（78）、ミャンマー（20）、中国（197）、韓国（98）、南西アジア諸国7カ国（93）、モンゴル（10）、アフリカ諸国41カ国1国際機関（97）、カンボディア（30）、ラオス（20）、ヴィエトナム（98）計74カ国・地域、1国際機関				

(3)青年招へい事業国別年度別受け入れ実績

国名＼年度	昭和59	昭和60	昭和61	昭和62	昭和63	平成元	平成2	平成3	平成4	平成5	平成6	平成7	合計
インドネシア	149	150	150	150	150	149	150	149	147	149	145	150	1,788
マレイシア	147	148	150	150	150	150	150	150	150	150	150	149	1,794
フィリピン	149	150	150	150	150	150	149	147	148	149	150	149	1,791
シンガポール	149	150	150	150	150	150	150	147	149	149	147	146	1,787
タイ	149	150	150	150	150	150	150	150	149	147	150	150	1,795
ブルネイ	5	30	49	50	50	49	50	43	50	48	49	48	521
ASEAN諸国小計	748	778	799	800	800	798	799	786	793	792	791	792	9,476
モンゴル	—	—	—	—	—	—	—	—	10	10	10	10	40
ミャンマー	—	—	10	10	0	0	0	0	0	0	20	20	60
インド	—	—	—	—	—	—	—	30	29	30	13	23	125
バングラデシュ	—	—	—	—	—	—	—	20	20	20	20	20	100
パキスタン	—	—	—	—	—	—	—	20	20	20	20	20	100
ネパール	—	—	—	—	—	—	—	10	9	10	10	10	49
ブータン	—	—	—	—	—	—	—	5	5	5	5	5	25
スリ・ランカ	—	—	—	—	—	—	—	10	10	10	10	10	50
モルディヴ	—	—	—	—	—	—	—	5	5	5	5	5	25
南西アジア諸国小計	—	—	—	—	—	—	—	100	98	100	83	93	474
アフリカ諸国	—	—	—	—	—	—	—	—	—	50	100	97	247
フィジー	—	—	10	10	11	12	12	12	12	12	12	12	115
パプア・ニューギニア	—	—	10	14	30	34	30	30	30	30	30	30	268
その他太平洋諸国・地域	—	—	—	—	45	38	36	32	36	34	38	36	295
太平洋諸国・地域小計	—	—	20	24	86	84	78	74	78	76	80	78	678
ヴィエトナム	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	98	98
カンボディア	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	30	30
ラオス	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	20	20
インドシナ小計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	148	148
合計	748	778	829	834	886	882	877	960	979	1,028	1,084	1,238	11,123

分野別プログラム実施県



2.招へい青年の印象

■アジア

■ブルネイ

日本における恒久の思い出

ダヤン・ラエダ・ビンティ・ハジ・マスリ
(社会開発グループ)

1995年9月13日、午前6時22分頃、4人の学生を含む、14人のグループが成田空港に到着しました。最初の宿泊先は東京のホテルメトロポリタンで、その後、次々に滞在する予定のホテルは7カ所になりました。

私たちの期待通りに日本は非常に工業化され生産的な国であると同時に、それにもかかわらず、人々はとても友好的で、正直で、協力を惜しまない人たちでした。日本滞在中に私たちに用意された日程はほとんどが見学で、広島の原爆資料館や皇居のように、興味深く、素晴らしいところでした。また、講義を受け、質疑応答の時間も設けられていて、日本人青年とはグループ討論会をするだけでなく、社会活動としてのスポーツや買い物も共にしました。各グループの発表の時には、ブルネイ側がほとんど担当しましたが、日本人参加青年も発表してはいかがでしょうか。

岡山でのホームステイは、私たちのほとんどにとって最高のものとなりました。知り得た情報によれば、岡山県ではブルネイ人の受け入れは初めてだったそうです。この県は外国人に対してとても厳しかったのではないでしょうか。県庁表敬の際には、副知事にお会いし、記念撮影をする機会に恵まれました。

ホームステイ中、私たちはできるだけ日本語を話そうと努めました。その時に受けた温かいもてなしの心は、未だにそれぞれの胸の中に残っています。したがって、岡山の歓送会では、ホームステイのあまりにも短い滞在期間のことを思い、ほとんどの者が涙しました。

閑谷学校と大和小学校も見学しました。閑谷学校では初めて講義室に入室を許され、掃除も体験しました。その前に、入室の際の正しい礼儀作法を教えられ、それから、退室の前には、講義室の床を拭くという忘れられない貴重な体験をしました。

最後に、全体として、このグループは日本及び訪れた各県で楽しい思いをしました。「さようなら」とお別れしなければなりませんが、数々の思い出はまだ鮮明で、その思い出をたどると、つい昨日であったように思います。日本の皆様、いろいろありがとうございました。JICAの方々、この青年招へいプログラムを企画していただいたことを感謝します。

私の日本での滞在

カイラル・サレー・ハジ・
アブドゥル・ラーマン
(ASEAN混成 報道グループ)

私は、日本社会が農業から工業を基盤とした経済へ、そして第三次サービス産業へと猛烈な変化を遂げたことに感銘を受けた。

この移り変わりは近代化の段階を経て、経済や社会発展のドラマティックな変化へと至った。

このプログラムは、下記の事項を含む日本の文化のさまざまな面で、私の理解を深めた。

a. 結婚、教育、職場の女性のような家庭生活

b. 伝統的な芝居や芸能：日本の舞踊「阿波踊り」

c. 伝統的な芸術や工芸：陶芸や機織り

d. 宗教：仏教、キリスト教、神道(数々の寺院見学)

e. 日本の食べ物と飲み物

私は、日本を民主的で平和を愛する国として再建させるのにマスメディアが果たした役割に感銘を受けた。

私は、日本の世界に向けた新しい玄関口、埋め立て地に建設された世界で最初の空港である関西空港に魅せられた。

私は、今年1月未明に神戸市を襲い、4000人以上もの命を奪った大震災に対し同情し、気の毒に思う。私はこの地震で家屋や職を失った方々、そして愛する人たちを失った方々に対し、心よりのお悔やみを申し上げたい。

私は、神戸市役所が市民生活を元に戻すよう、市の機能をできるだけ早く復旧させるるために集中的な努力をされているのに感銘を受けた。

広島平和記念公園の見学中、広島市が原子爆弾の影響を展示しているように、私たちは核兵器の撤廃の重要性と、広島の切望する恒久的な世界平和の実現の重要性についての意識を高めた。

主催者により、人間性に焦点を当てた日本紹介が行われたので、この青年招へいプログラムでの短い滞在中に、日本に対する理解がより深められ、よい印象をもつことができた。

■アジア

■インドネシア

日出づる国・日本をめざして：すべて思い出のなかに

ハスニニ・ハスラ
（教育グループ）

日本にいる――これは私にとって、非常に現実離れした感覚だった。何しろ単なる観光ではなく、それどころか、青年招へいプログラムの代表者として国の名前を背負って来たのだから。全く考えもしない間に、気がつくとあの世界に名高い大都市東京にいる、この不思議な成り行き。グループの仲間たちと各地を巡り歩き、多くの事柄がそれぞれプラスの価値をもたらしてくれた。

最新の技術が独特な伝統の要素と調和融合している姿を目にした時、まるで多面体の絵に向き合っているようだった。日本では、さまざまな儀式が今なお社会の細部にまで根を下ろして続いていた。合宿セミナーで日本の若者が茶道を披露してくれた時には、敬意すら覚えた。日本の社会生活のすべてが現在も伝統のリズムを保ち、そのリズムは、最近欧米のスタイルを好むと言われている若者のなかにも流れていた。合宿セミナーを通じてさまざまな情報交換ができたことはたいへん興味深かった。

教育の現状も、先進国である日本の存在に、改めて目を開かせてくれた。いくつかの学校の視察では、日本が経済や産業ばかりではなく、教育も他を圧倒するレベルにあるという結論が得られた。幼稚園を訪問した時の驚きも大きかった。そこには3歳以下の乳児もいたが、こんなに幼い頃から社会性を身につけ自立するためのプロセスが始まっているとは、何と素晴らしいことだろう。

私は自分がおかれた周囲の環境を観察することがしだいに楽しくてしかたがなくなり、同時に複雑な感慨を覚えざるを得なくなっていった。山形でのホームステイの時がそうだった。山形の人々は、私のホストファミリーも含めて皆、友好的で偽りのない姿で接してくれた。これは私の率直な言葉で、決して過ぎた称賛ではない。おかげでホームシックなどはどこかに吹き飛んでしまったほどだった。

言葉で表現しきれないことは多い。文化、芸術の香り高い訪問先では、私の感慨も一層深いものになった。山形の自然は、山、川、谷のどれもが、私の称賛する気持ちを共に高め、そして大阪に向けて山形を去る私に、さようならを告げてくれた。

このすべてを、いつまた再び目にすることができるのだろうか。脳裏に刻まれたことはメモリーにすぎず、また再び自分の目で確認したいという気持ちは募るばかりである。別れを告げるのは、本当につらい。もう一度戻ってきたい、いつになるかは分からないけれど。でもすべては忘れることのできない、貴重な体験だった。祖国に戻っても、このことだけは変わらないだろう。

JAPAN IS MEMORY.

プログラムの感想

ソニ・ドレスティアナ
(社会開発グループ)

このプログラムに参加できることは幸運なことだ。日本へ旅行に行ける人はいるが、そういう人々がみんなこのプログラムのように観光地ではないところを訪問できるわけではない。

このプログラム全体を私は二つの点から見てみた。すなわち、プログラムの計画・準備体制と目的の達成という観点である。計画・準備体制についていうと、たいへんプロフェッショナルである。時間の配分や計算、与えられた資料などほとんど間違いがない。また参加者たちは間接的に規律正しさを訓練された。この与えられた規律正しさはインドネシア人にとって意味のある、有益な〝お土産〟である。

プログラムの目的の達成という面からみると、時々戸惑うことがあった。私がここで得たものを、帰国してからどうしようというのだ？　しかし友人たちが得たもの、とりわけ社会問題に携わっている友人たちがこのプログラムで得たものは、たいへん有益であったと思う。社会問題に携わっている友人たちはこのプログラムで、特に技術的な事柄について多くを学んだようだ。

私自身のバックグラウンドについてこのプログラムから何を得たかというと、日本の社会がどうなっているのかをさらによく知ることができたことである。直接日本の社会を見ることができた。

プログラム全体を通して私は、このプログラムは参加者がその目的、テーマに沿った背景をもった人間であるなら、たいへん有益なプログラムになるだろうということを感じた。もしこのことをないがしろにしたら、このプログラムは〝インドネシア人〟にとってただの日本旅行にすぎなくなってしまうだろう。

日本に対する印象

ルシアナ・カリム
(経済Aグループ)

JICAのこのプログラムに参加できたことを神様に感謝したい。1カ月間日本を回ることができたからだ。そしてその間、直接日本の人々と知り合い、先進国としての日本の文化や高度な技術に触れることができた。

日本に対する最初の印象は、日本の人々の時間や仕事に対する規律正しさだった。人々は時間を大切にし、予定を立て、立てた予定をうまくこなしていくことに慣れている。また勤労意欲が高く、仕事に対してもひたむきである。そしてある事をやりたいと思ったら、深くプロフェッショナルにそれに打ち込む。

その反面、日本は開発や技術面で先進国でありながら日本本来の文化を失わず、日々の生活のなかにそれらが息づいている。それを私は日本滞在中、特にホームステイを通して感じた。人々は親切で家庭的である。

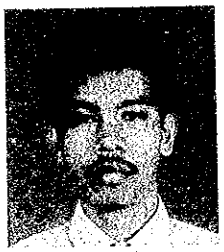
日本では開発が担当省庁間で総合的に行われているので、一つの施設が常に他の施設との関連を考慮の上に建設されている。だから都市計画は実際にその計画通りに行われている印象を受ける。

都市の規模の大きさにかかわらず、どこでも社会整備が充実している。都市と地方による違いは見られない。すべての国民が開発の恩恵を受けている。

日本滞在中に見たり感じたりしたことは、決して忘れることができない思い出になった。多くのことが有意義であり、それは私の将来に役立つものになると思う。

日本の家族像

ニダ・タルニダ
（経済Ｂグループ）



日本人は規律正しく仕事熱心なことで有名だ。日本という国は、たった50年足らずで戦後の荒廃から立ち直ったばかりか、他の先進国と肩を並べ、さらに追い越してしまった。その仕事熱心さはすごいもので、大多数のサラリーマンが夜更けまで働いていたり、飲み屋で仕事の話をしているのも日常茶飯事なのだ。

では、日本の家庭はいったいどうなっているのだろうか。私は、このたび日本政府の招きにより１カ月間日本に滞在する機会を得た。このプログラムに参加するにあたって、私がいちばん知りたかったのは、一家の大黒柱が、家よりも会社で過ごす時間のほうが長いという日本の家族のあり方であった。この国では、父親と母親の家庭内での役割が非常にはっきりしている。つまり、父親は生計を支える役で、母親は子育てや、子供の教育に力を注ぐ役といった具合だ。家族がそろって顔を合わせる機会といえば、出勤前または登校前の朝食の時だけだ。厳しい競争のある職場環境や、経済的な理由による父親不在の家庭は少なくない。父と子は触れ合う場を失い、子供が成長するに従って父親はだんだん他人のような存在になっていくという。

こういう話を聞いた後、私は東京から60kmほど離れた町でホームステイをすることになった。この３日間は、日本の家庭を直に見るよい機会だった。ちょうど週末にかかっていたため、いつもは仕事に出かける〝お父さん〟も家にいて、家族全員で半日かけて郊外へ出かけたりもした。夜には、家族全員で楽しく食卓を囲み、その日の出来事について話した。

家族の生活を支えるため毎日仕事に追われている父親は、子供と過ごす時間がほとんどなく、休みはなるべく子供と一緒に過ごす時間を取ろうとする。子供たちもそれを楽しみにしているようだ。週末を家族全員で過ごすのは、父親と子供の関係を維持していく上で大切なことなのだろう。

以上が、合宿セミナーで知り得たり、ホームステイで直に体験した、私なりの日本の家族像である。このプログラムのなかで、私たちはお互いの文化に触れることができた。異国の文化を知ることは、同時に自国の文化をも学ぶことではないだろうか。

ホームステイ

カメリア・インドゥリサリ
（農業グループ）

青年招へい事業に参加してたくさんの非常にお

もしろい経験をした。必要最低限の日本語ではあったが、どうにか日本人とコミュニケーションを図ることもできた。

私がホームステイしたのは、鹿児島市から車で1時間くらいかかる日吉町という小さな町だった。

ホストファミリーはタバコを栽培している専業農家で、夫婦で農業機械を使い農業を営んでいる。子供たちは男の子2人、女の子1人で学校に通っている。

私たち2人がホームステイの家に到着すると、家族全員で大歓迎してくれた。そしてみんなで身振り手振りをまじえて家族のこと、自分のこと、文化や風習、教育などについてたくさんおしゃべりをした。子供たちは少しだけ英語が理解できた。

次第に私たちの間のコミュニケーションはうまくいくようになったが、そんな時、後々まで語り草になった出来事が起こった。私たちとホストファミリーの間の勘違いが原因だった。それは、私たちが「お祖父さんやお祖母さんはどこにいるのですか」と尋ねたことに端を発した。ぜひ、会って一緒に話をしたり、写真を撮ったりしたかったのだ。翌朝、子供たちが登校した後、ホストファミリーの知人たちと一緒に出かけることになった。私たちはお祖父さんやお祖母さんに会わせてくれるのだなと想像した。「お祖父さんとお祖母さんは？」と尋ねると、「眠っている」とのことだったので「家で寝ているのだな」と私たちは解釈し、喜んであとについていった。そしてなんと、連れていかれたのは、「墓地！」だった。怖かった！　が、しかたなく、私たちはお墓にお参りをして、「眠っている」お祖父さんとお祖母さんと話をして、一緒に写真を撮った……。

私の驚きの日本

ラッミ・カダリ
(ASEAN混成 教育1グループ)

私はJICAの青年招へい事業、インドネシア青年として日本に来る機会を与えられました。1995年10月25日に日本に着き、30日間滞在しました。来日後数日経ってから、私はさまざまな驚きに満たされました。そして発明、新しい情報、経験と想像豊かな発想に驚きました。この機会が私にとって初めての外国旅行です。このプログラムに参加できてとてもうれしいです。日本についてより深い知識を得られると同時に他のASEAN諸国、シンガポール、マレイシア、タイ、ブルネイ、そしてフィリピンの青年たちと出会うことができたからです。

まず最初に、私は日本についての有益な知識を得ました。それは日本が、コンピューターを駆使してしっかりとした経済基盤を備えていることです。日本人が勤勉で礼儀正しいことも分かりました。また、集団意識の強さも見られます。日本の教育制度にも感銘を受けました。

次に私は日本滞在中にいくつかの貴重な体験をしました。日本文化や歴史について多くの知識を得るとともに、ASEAN諸国と異なる教育制度と問題点やその解決の方法を知りました。また日本の教育実践の方法と技術、日本人が直面する問題への取り組み方も学びました。

最後にいちばん大切なこととして、自国に適応できる新しい発想を得ました。この情報を私の政府、社会、学生たちに伝え、さらに自国の報道機

関に知り得た知識と経験を語りたいと思っています。

全体からみて日本について実質的に学べる点で青年招へいは良いプログラムであると実感しました。大いに支持したいと思います。できることならこのプログラムを2～3カ月間に延長して、日本社会と文化について、より豊かな経験とより深い知識を体得したいと願います。

私の友達、スージーに特別な感謝をこめて

■アジア

■マレイシア

私が見た日本人の特徴

ウーン・ビー・ロー
(経済経営グループ)

日本人は客観的かつ生産的な、独自のアイデンティティーを持っているように思われる。私は決められた事柄は、それぞれがスムーズに、そしてまた完璧に行われていると感じた。日本社会は、常に最良のものを他に与えている。例として、まず食事のことが挙げられる。食事はバランスのとれた栄養を与えることのみならず、誰もが食欲をそそられるよう、色とりどりに美しく飾られているのである。そのように美しく飾るということは、あたかも日本人が日々の忙しさを忘れ、心のよりどころをそこに求めているかのように感じる。

次に、日本での来客を迎える人々の、親しみあるもてなしや優しい微笑みは、悩みに直面している人をも、それを忘れさせてくれるほどである。このようなもてなしは、どのように挑戦してみたとしても、世界中どの国においても見つけることはできないであろう。

講義においては、私たちマレイシア青年に対して、情報や知識を伝えようとする講師の熱心さが、日本語を理解しない私たちにも、驚くほど十分に伝わってきた。日本人青年やコーディネーターにしても、この全プログラム期間中、一生懸命に成し遂げようとする姿勢が見受けられた。これはどのような状況においても、彼らが常に辛抱強く、そして助け合いの精神に満ちているということを

表しているものである。

あらゆる製品は非常に丁寧に、注意深く、また性能よく作られていた。この繊細な芸術とも言えるべきものは、日本人の仕事に対する誠実さや、彼らがかつて物を作る時に直面した問題から、生み出された賜物なのだろう。

日本人は職種を問わず、どのような仕事に対しても非常に忠実である。このことは、ナイトクラブの前で大雨で寒い中にもかかわらず、直立してその風俗営業の看板広告を持っている人に対しても同じことが言える。

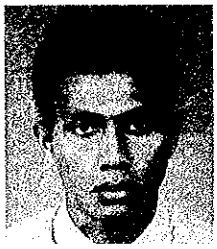
たとえ全般的な日本社会の特徴が、物質的には完璧のように見えるとしても、まだ十分でない面もある。日常生活における日本人の熱心さは、ただその生活だけに重点を置き過ぎているように思える。もしこの現状が彼らにとって、最高の満足感を与えているかどうかについて考える時間が、一日10分でもよいからあればいいのではないかと思う。

製品の成功は、その製作者の意図することが満たされたかどうか、というところにある。冷蔵庫を例にとれば、これを作り出した人の、物を冷やすという意図することが満たされたところに、この物の成功があるということが言える。そのように、一人の人間が成功したかどうかということは、それを生み出した者の意図を満たしているか否かによるものである。たとえ一般的に、人間はこの世において最も完璧な創造物であると理解されているとしても、人間がもつ賢明さに、将来起こり得るすべてのことを予測する能力はないのである。神戸で起こった災害は、人間のもっているすべての知識と技術が、その災害を避けるための能力を持たない、ということを証明したのだ。

それぞれの視点から言えることは、人間は多くの弱さをもっていて、その弱さという事実を私たちが心から受け入れることは、より意味のある、素晴らしい、そして希望をもってすべての問題に立ち向かう人生を、もたらすことを認識させるであろう。

見習うべき積極的な態度

ムザファル・ビン・アブドゥル・ムタリブ
（中小企業グループ）



マレイの格言に、「遠くへの旅は知識を増す」というものがある。ここで言う「旅」とは私たちが日本に滞在した１カ月間を意味し、「知識」とはこの間の訪問や観察から得たことを意味する。日本での滞在中、私たちは日本人がものごとに対し、非常に特別な態度と注意深さを持っていることを見いだした。この態度が、日本人の生活の一部分となったのである。

日本人一人一人の振る舞いや勤労に対する姿勢は、あらかじめ形成されている自己規制が基盤となっている。たとえば、東京ディズニーランドにおいて、訪問者たちはその旨の指示がなくても、きちんと並んで順番に写真を撮っているのである。またサービス業では、客を第一としていることも知った。売店の従業員は、たとえ客が目の保養にその店をのぞいただけであっても、その客をいやがらずに対応するのである。客もまた商品のさまざまなデザインに心を引きつけられる。たとえば、客のニーズに合うように工夫された、多様な模様や形をした扇子などが、その一つである。

異なった状況の中で、一つの技術――ここでは「自動販売機」を挙げてみる――を実践的に使用したり、その状況に適応させたりする日本人の聡明さは、日常生活に不可欠なものとなっている。「イ

ンテリジェンス自動販売機」とも言える多くの種類の販売機は、タバコ、電車の切符、テレホンカードなどの場合、また、ボウリング場などの娯楽施設での両替機など、あらゆる場所で見られる。

公共施設を利用する人々の礼儀正しさは、私たちの心を引きつけるものがあった。歩行者が道路を横断しようとする時、あたかも敬意が払われているように見えた。それは、運転手が歩行者を優先させるために、車を止めるからである。

私たちは、日本人が時間を貴重なものととらえていることに非常に驚いた。そして、時間に対してこのような素晴らしい考え方をもっていることに、日本人自身がもっと誇りをもつべきだと感じた。私たちが最も身近に感じた例は、電車である。電車は常に時刻表に従って運行され、重要な交通システムになっている。

結論として、日本が先進国の一つとなった理由は、日本人のもっているこのような積極的な態度からである、ということができる。これまで述べてきたことは、ほんの小さな事柄である。しかし、このような小さな課題でも、日本人はおろそかにしないのだ。ましてや、技術というような大きな課題に対してはいうまでもない。これが、私たちの見た日本である。

日本の開発と発展の結果

アフマッド・ナズリ・ビン・サアッド
（農業開発グループ）

今日では、日本が経済発展の中心的役割を担っていることは明らかである。このことは、日本において推進されている計画やそれに伴う発展の様子からうかがうことができる。勤労熱心な姿、規律、責任感、組織への忠誠心、注意深さ、仕事における正確さなどは働く人々のすみずみにまで行き渡っている特性である。また時間の管理が個人や、社会や、組織によって完璧に行われていることにはたいへん驚かされた。このことはさまざまな活動に関連してくることなので非常に重要なことである。たとえば、日本の交通システムは、正確さとスムーズさ以外の点においても完璧なものであるといえる。このシステムでは、混雑を避け、事故や汚染のリスクを減少させることが可能である。この正確さやスムーズさは、他の活動を実施することに効果的に関連している。

日本民族は主に一民族から成り立っており、一つの言語が流布している。これは、日本において、一つのナショナリズム精神を容易に形成することに貢献した。複合民族国家であり、一言語に基づく一文化に、すべての民族を統合しなければならないマレイシアのような国とは異なり、日本は「国家建設」の課題に集中することが可能であった。

この課題は重要なテーマになっており、すべての政策は、国家の指導者によって練りに練られ国民によって遂行されることが望まれている。この日本とマレイシアとの違いは、日本が先進国へと足を踏み出す際に有利となってきた。しかし、急速な発展は、個人、家族、社会、そして国家においても否定的な面を引き起こした。特にこれは発展途上の国において常に伴う現実である。しかし否定的な側面が、減少されなければならないのは当然のことである。たとえば、青年におけるモラルの崩壊や、年長者や師を敬う態度や、古来からの伝統がすたれてしまってきていることも否定的な側面の一つである。しかしながらこの見解や評価は、これらの問題が起こっているという共通の認識があるとしても、明らかなデータに基づいているわけではない。本来すべての政策は、その国

の発展段階において否定的な側面が起こらないように練られなければならい。

国の発展のために勤労を促進しようとする態度は、家族との交流の機会を減少させる原因となった。これは、家族の関係に悪影響を与えた。なぜなら家族と触れ合う時間が減少すると、家族間の調和を図ることが難しくなるからである。このように、否定的な要素は、家族や、社会や、国家に悪い影響を及ぼしやすいといえる。

急速な発展は経済水準を引き上げ、同時に農業部門をないがしろにする原因となった。農地の価格は高騰し、労働力は不足した。そうではあるが、日本はこの問題を解決する手段をとってきたため評価されている。また、農業は環境に対してより注意を払うように方向付けられてきた。このことは有機農業実施に対する公的援助や農業従事者の福利厚生を含む農業形態におても重要視されている。

以上が、私が日本滞在中に感じたものの一部分である。さまざまな分野における急速な発展の過程において、多くの社会は、未だに友好、親密さ、互いの尊重などの価値を保持している。これらの価値観はすべて、国、宗教、文化を超えた友好関係を育むことに貢献するということを付け加えたいと思う。

夢が現実に

スハイミー・ビン・ラムリー
(教育グループ)

日本はアジアだけでなく世界的にも驚くべき発展を遂げた国である。だから、日本訪問は戦後の復興を見たいという各人の憧れであった。

日本へ初めて足を踏み入れて、私たちは近代的な国であることと、その急速な近代化を目のあたりにした。日本の成し遂げた発展は、私たちに原爆による崩壊のことを曖昧なものにした。しかし、それこそ日本に実際に来てみて、実感し、深める必要のあることである。

いったい日本はどのようにして発展を遂げたのであろうか？　その鍵は、仕事に携わる時及び空き時間の規律にある。日本人は疲れることなく超過勤務も厭わずに働く人たちである。彼らにとって、企業の生産はより重要なものなのだ。時間厳守の面をみても私たちの役に立つものがある。プログラムの日程表から分かるように、事実そうなのである。すべてが計画どおりに進められることこそ、規律あるまたは責任感のある彼らの勤労観であり、それは世界的にも驚きの目で見られるものである。

文化面でも、日本の文化はたいへんユニークである。たとえば、茶道。それはたいへん秩序正しく行われる。一つ一つの動きは文化のきめ細かさを反映している。もう一つ忘れ得ないことは着物の着用である。着物の方式やきめ細かさはたいへん優雅なものであった。各習慣はそれぞれ独自の意味をもつのだ。

衛生の問題にも触れてみよう。それはたいへん重要視されている。地球的規模から私たちが些細なことと考えるに至るまで。

もう一つ驚くべきことは素直さである。何故であろう？

忘れ物は一つも欠けることなく届けられる。一人一人が心がければ、どんなにこの世は平和になることだろう。私たちの幸福の鍵は平和にある。日本の苦い歴史が私たちに、いかに人間同士の調和が大切かということを教えている。実際に数え上げれば、美しい役に立つ経験はたんさんあるが、

文字にするのは難しい。ここで大事なことは、運命を変える者が国民自身でないならば、その国は変化することはない。

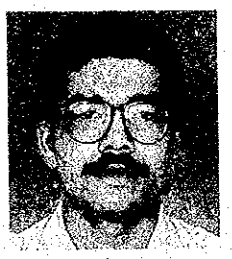
最後に、JICA及びマレイシア人事院に厚くお礼を申し上げたい。そして、忘れてはならないのは、PAMAJA（青年招へい事業同窓会）、ユースワーカー能力開発協会、コーディネーター、宮崎北郷のホストファミリー、日本青年、そしてこのプログラムを成功させてくれた、夢を現実のものにしてくれた人たちである。彼らなしには私は何もできなかった。

最後の言葉に続けてマレイの四行詩を紹介したい。

パンダン島は中程に遠く
ダイク山は三峰に分岐す
砕かれし肉体は地に満つとも
良き行いは忘れられず

友情

マット・アザミ・ビン・ヨップ・ユヌス
（科学技術グループ）



私の日本に対する知識は、世界で最も発展した国ということである。すべての面で発展しているのである。熱心に仕事をし、非常に規則正しく、文化や伝統習慣を厳守し、正直で信頼できる、猜疑心がなく、常にオープンな考え方をする唯一の民族である。

マレイシア人事院から、この青年招へい事業への参加機会を与えられた時、私は非常にうれしかった。それは、尽きることのない喜びだった。この日の昇る国に足を踏み入れることができることは、思いもよらなかった。今、それは現実となった。一つの、甘美な思い出である。美しく、忘れがたい思い出である。

すべてはMARA科学専門学校とトローラでの、人事院、PAMAJA、そしてJICAによる、団結の精神を培うための試みから始まった。来日前の現地プログラムは、クアラルンプールのウィスマ・ブリア（青年会館）で行われ、私はたくさんの人と知り合った。私たちは、団結の精神を培うことを通して知り合い、この団結の精神は、私に「友情」ということの意味を教えてくれた。知り合い場所、本当の友達、そして友情はなんと大切なのだろう。親類から遠く離れ、家族からも遠く離れ、このように遠い外国に居る時、友達は親戚家族、そしてすべてである。

9月13日午前6時30分、忙しい日本人たちが、新しい一日を始めようとしている時私は、「青年招へい事業」に参加する一行と共に、成田国際空港に降り立った。故郷の国から、私たちが日本に持ってきたものは、どんなことにもくじけない精神であった。宿舎である東京のホテルメトロポリタンに到着後、私は友達と池袋のあたりを散歩をしたり、歩き回ったりした。

日ごとに、ホテルメトロポリタンでの生活は日常のものになった。セミナーに次ぐセミナー、講義に次ぐ講義。参加者と日本の人々の絆は、ますます強くなった。心ひかれる経験であった。ボランティア参加の日本人との体験的日本語学習は、非常に素晴らしくおもしろいものであった。言葉の違いは障害にならず、その効果は非常に意義のある深いものであった。これと同じような感情及び経験は、地方での合宿セミナーで日本人青年と文化や交際を通して友情を深めた時にも再現された。

ホームステイでは、ホストファミリーの心臓の鼓動が身近に感じられるほどまでに、親密さが高

まった。大層美しく甘美であった。できるだけ多くの、純粋な心を持つ人と友情を深めることは、決して無駄にならない。

ここで、私は古いマレイのパントン（韻をふんだ四行詩）を、思い出した。

遠くにルビー色のマンゴーの新芽
掌にゴンズイの稚魚
遥か離れて何千マイル
視界に消えても心に残す

ホストファミリー、友人たち、そして新しく知り合えた人たちに贈る歌である。

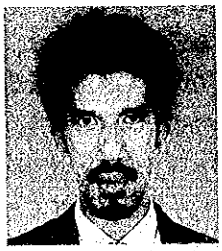
傍らで私は、ホストファミリーと「指切りげんまん」と、声を揃えて約束した。「指切りげんまん、嘘ついたら、針千本のーます！」これは、ホストファミリーと一緒にいた時の、心に残る確かな約束である。

広島の史跡訪問や、墓参もまた心に残るものであった。時間の不足や、疲労はあったけれども、それぞれの訪問はとても意味のあるものであった。

東京、豊川、京都、大阪、そして広島は、私の人生におけるノスタルジーとなり、一つの思い出として、忘れることのできないものとなるであろう。

日本：私の体験

サイフル・バハリ・ビン・ジョハール
（ASEAN混成 教育２グループ）



受入団体紹介の時に、ある青年が自己紹介で自分の名前の代わりに国名を言ってしまい、その部屋中に笑いが起こった。

そう、こうして私たちのプログラムは楽しいスタートを切り、日本語学習がいかに役立つかを証明することにもなった（ネムイデスカ？）。そして、日本友愛青年協会のグレートな三浦さんが登場した。彼はいつも〝Be happy〟と、私たちにプログラムを楽しむようすすめてくれ、私自身それを実行し、プログラムの間中、大好きでいられた一人となった。

最初の講義にはどちらかというと失望させられた。私には馴染みのない和製英語が使われていたからだ。でも、その後、他の講義には馴染むことができた。

たくさんの歴史的な場所や博物館訪問は、とても素晴らしく、日本が行政、経済、文化の近代化に久しく関心を持ってきたことに驚かされた。

たくさんの学校を訪問し、教室で生徒たちと個人的に触れ合う機会を持てたことは、とても意義深い経験だった。しかし、青年のうち、男性陣に奇妙な現象が見受けられた。彼らは女子生徒に手伝ってもらわないと、折り紙が折れなかったのだ。「何故なんだ？」それはさておき、生徒の皆さん、教室での給食をありがとう。とても楽しかった。

日本滞在中、最大のクライマックスは熊本でのホームステイだった。私にとってホームステイは、これからの人生の宝であり続けるであろう最高のプログラムとなった。ホストファミリーである忠信さんと奥さんの保子さんのおかげで、本当に生活感のある滞在ができた。彼らはいつも私を本当の息子のように扱ってくれ、実際、私は過保護な息子であることに喜んで甘んじたのだった。パパ、ママ、ありがとう。ホームステイはプログラムの必須項目にすべきだと思う。ホストファミリーに会うまでは怯える青年もいるけれど、結果として皆にとって素晴らしい思い出となるに違いないから。

着物の着付け体験の時には、私はマレイシアの同胞を見分けるのに苦労してしまった。彼らはマ

レイシア人より日本人に近い様子になっていたから。着付けの先生方の素晴らしい手腕、本当にプロフェッショナルだった。

合宿セミナーでは日本人青年と深く知り合うことができた。彼らと私たちは、料理に使うスパイスを一緒に買いに行き、公私にわたって討論した。彼らは私たちの国の料理を作る手伝いをしてくれたが、料理といえば、ハラルミートを手配してくださった三浦さんには本当に感謝している。ある夜は、朝の4時まで起きて話をしていたが、親しい友達になるのに言葉の違いは何の障害にもならないことをその時感じた。

水俣と広島を訪問したことは忘れられない。人が他人に対して、わがままであった結果起こった悲劇。少数の人々の欲望が、多くの罪のない人々に生涯にわたる苦悩を与えてしまった。広島で私は、誰が咎められるものでもなく、平和は常に一人一人の心の中にあるべきだということに気づかされた。核兵器は私たちの生活から完全に排除されなければならない。

新幹線での旅は速かった。ひゃあ、なんという体験だったろう！　しかし、そこで私たちは常に警戒していなければならなかった。私たちのグループには青年の寝顔を撮ろうと待ち構えているプロの写真家がいたからだ。しかし、最後には彼女自身も自分で仕掛けたゲームの犠牲者となった。

私たちのグループにとって幸運だったのは、2人の美しいコーディネーターがいつも一緒にいてくれたことだ。彼女たちは私たちの希望をかなえようと常に親切に気を配ってくれた。その時々に必要な最新の情報を与えてくれた。慶子ちゃん、サニーさん、サンキューベリーマッチ。

このプログラム関係者の皆様に心からお礼申し上げます。そしてこれは素晴らしい日本滞在を経験できた私たちのグループ全員の気持ちでもあります。皆様が私たちに見せてくださった素晴らしいホスピタリティー、温かい愛情に溢れた国だと実感しました。

私から……サヨウナラ。

■アジア

■フィリピン

山梨：故郷から遠い故郷

ハヤガン・マリア・パーリー・ジョアン
(教育グループ)

日本の中心部に、私がかつて訪れた最も美しく、忘れがたい地……山梨があります。

「訪れた人々が愛してやまない地、山梨には何があるのだろう？」

この問いは、私たち95年度青年招へい事業、フィリピン教育グループの22人の招へい青年を始め「日本の環境的首都」山梨を訪れる人たちに繰り返し問われてきました。さまざまな答えがありました。私自身も一、二度答えを出そうと努力しましたが、私の思いを言い表す的確な言葉をいつも探しあぐねていました。

私はかつて山梨は世界で最も写真に撮られている火山である富士山がすべてを表していると思っていました。そして、日本人の友人に、「山梨はとてもきれいです。私たちが一目で愛するようになったのは、そこに自然との調和を見たからです。そしてあなたたちの偉大な財産は富士山です」と言いました。私が驚いたのは、富士山は山梨のすべてでもなく、それで終わりというものでもなかったのです。山梨はほかにも秘密があり、富士山の栄光とはハッキリと分かつ自然の宝庫のショーケースです。これらは山梨に住めば分かることでしょう。

私の山梨での10日間の滞在は、山梨のすべての観光名所や歴史的旧跡を巡るにはあまりに短過ぎました。一方、日本の縮図である山梨の異なった生活面を知るには十分な長さでした。

山梨でのさまざまな学校訪問は日本の教育制度をより明らかにしてくれたばかりでなく、日本とフィリピンとの教育制度上の共通点や相違点をもはっきりさせてくれました。訪問した際には私たちはまさに一体感で包まれた感じがしました。生徒たちは言葉の障害にもかかわらず、自分たちの先生に対する時と同じように私たちに熱心に応えてくれました。それはあたかもフィリピンのクラスに戻ってきたかのような気がしました。基本的には、両国の教師は同じ教科を教えています。唯一の違いは、日本の生徒は教科や課題がよりよく理解、応用できるような器具や教材が利用でき、より恵まれている点です。一方、フィリピンの生徒は、これら教材の不足を補うため、想像力と創意を駆使しなければなりません。それはフィリピンが開発途上国であるという現実を受け入れ、認めなければならないことでもあります。

多くの博物館や寺院の訪問はたいへん学ぶところが多いものでした。それは日本の文化や伝統について一層考えさせてくれました。なかでも1994年のギネスブックに世界で唯一の影の博物館として登録されている、昇仙峡の影の博物館には魅了されてしまいました。自然が輝き、美しさの絶頂にあり、動物、木々、花と人間が調和をとり合って暮らしていた時代に戻ったような感じになりました。それはまさに山梨の自然を愛する人たちを反映していました。

私は問いへの答えを探す際に、私たちを一生懸命迎えてくださった山梨の温かく、親切で愛すべき人たちのことを考えずにはいられません。――山梨県の関係者、コーディネーター、日本人参加者、学生、先生、YMCAのスタッフ、バスの運転手とガイドさん、ロイヤルガーデンホテルの従業員、そしてホストファミリーの家族の方たち――私たちの山梨での滞在をたいへん思い出多いもの

にしてくださった方々。私はこれらの人たちが山梨の最も誇れる財産だと信じています。これがまさに私がなぜ山梨をたいへん愛するようになったのか、という問いへの答えなのです。そして、山梨は私の胸の奥深く、特別な位置を占めています。特に山梨の人たちは私たちに故郷から遠い故郷をくださった大切な人たちとして。

友情の翼

アルヴィー・ノネット・G・カピリ
(社会開発グループ)

時の流れは止めることも遅らせることもできない。私たちはもうすぐフィリピンに帰国する。結局帰るために旅立ったなんて、なんて皮肉なことだろう。同じ人間で同じような服を着ているのだから、私たちの帰国する様子は出国の時とまったく同じように見えるであろう。しかし、私たちはたいへん貴重なものを持って帰国する。日本での素晴らしい体験によって、まったく新しいものの見方を得ることができたのだ。

宮島、ホームステイ、合宿セミナー、ティー・セレモニー、さまざまなプログラムすべてに、私たちは驚き、迷い、喝采した。数えきれないほど笑い、数えきれないほど感動し、時には涙した。そしてその理由はただひとつ。私たちがすっかり日本を好きになり、まるでフィリピンにいる時のようにくつろいでいたからだ。

どんなに美しい風景も、ひとりで眺めているだけではつまらない。一緒に歩きながら、冗談を言いながら、それがたとえ微笑みを交わすだけであっても、誰かとその美しさを分かち合うことができたから、私たちは美しい日本の風景の輝きに感動することができたのだ。人と分かち合うことの喜び、これを言葉で説明することはなかなか難しいのだけれど、私たちは日本滞在中始終このことを感じていた。

グループのメンバーと、コーディネーターと、ホストファミリーと、言葉の壁、その他さまざまな困難を乗り越えて、私たちは大きな家族のようにして1カ月を過ごした。

ただひとつ残念だったのは、高校での討論会に参加した生徒たちがあまりフィリピンのことを知らなかったことだ。日本の人々に、もっともっとフィリピンのことを知ってほしい。

参加者一人一人の、他の国を知りたい、異なる文化を理解したいという真摯な熱意によって、国境を超えた相互理解の芽生えを私は確信することができる。そして、私たちがこの熱意を失わないかぎり、真に地球規模の国際理解の実現も達成できるであろう。

私の心の中で、世界共通言語である「友情と愛」が生まれ、大きく育っていくのを、これほど実感したのは初めてであった。そして、世界中の人々が幸せに暮らせるよりよい未来のために、私自身がなにか世界のために貢献していきたいと切望した。他のメンバーも、きっと私と同じ気持ちでいるに違いない。

新幹線

ホセ・アルモンドヴァール・カブレラ
(経済Aグループ)

新幹線〝ひかり〟の席に座っていると、田舎の風景が飛び去る。顔を窓に押しつけても樹木を揺さぶっている風の音は聞こえない。椅子に深く座り直すと、絵はがきのような風景が次々と去っていく。別の新幹線と、すごいスピードで行き交う。たぶん、〝のぞみ〟だろう。やがて、私たちはトンネルに入り、押し迫って来る暗闇の中を、どんどん突っ走る。今現在は、新幹線が私たちの世界なのかもしれない。

山梨のロッジでようやく見分けのつくようになった日本青年たちや、幾多の日本人たちの顔が頭をよぎる。私たちはひょっとすると別々の方向に向かって走っている新幹線に乗っているのかもしれない。しかし、想像以上に、二つの新幹線には共通点が多いとの確信を新たにする。雨で外の風景はよく見えないが、私たちの新幹線は目的地に向かって走り続ける。席で話に興じるのもまた楽しい。

また、別の新幹線がビュウーッと行き交う。〝のぞみ〟だろう。美しく飛び舞う風雅なホタルを探し歩いた庄原市での夜が思い出される。席に座りながら私たちの話は弾む。松林や杉林に囲まれた川手町、言葉で思いを伝えることはできなかったが、心が通じ合った。

〝ひかり〟の席で、吾妻山を思い出す。へとへとになった顔が目に浮かぶ。また、別の新幹線と行き交う。〝のぞみ〟かもしれない。私たちの旅もあと数時間で終わろうとしている今、だんだん強く思うことがある。私たちは、時々立ち止まり、辺りを見回す意義を忘れているのではないかと。そして、また会話は続く。大きな事、些細な事、過去や現在、そして、私たちの理想の世界像などについて。

私たちの新幹線が進むにつれ、日本の思い出話に浸る。この青年招へい事業への参加青年を温かく優しく迎えてくれた人たちのことなどを話す。また、車内での会話は続く。私たちは二つの違う世界に住もうとも、私たちの友情は永久に変わらない。平和を求める心は一つなのだ。

日本再発見

ラケル・レイエス・アグラウア
(経済Bグループ)

JICAの青年招へい事業は日本・フィリピン両国間の人々の交流を深めるのにこの上ないプログラムの内容でした。その上、以前から日本に対して抱いていたイメージを確かめると同時に日本の人々への偏見を修正するよい機会ともなりました。

計画の目的は一見やさしそうです。けれども日本においてこの目的を達成するのはたいへんなことでした。過去において二国間の友好的な関係に水をさすような出来事も多々ありましたし、日本人がそうしたことを態度に出してくるのではないかという恐れもありました。この1カ月間のあいだに起こった、当初のそうした心配を吹き飛ばすような出来事は、特筆に値するでしょう。

驚いたことは数多くありましたが、なかでもい

ちばん驚いたのは日本の人々自身のことです。当初真面目で取りつく島もないように見えた日本人は、たいへん温かく歓待してくれる、友情に厚い人々でした。共通の話題について意見を交換するうちに、私たちはいつしか自分たち自身についても、たとえば人格、賢さや、むら気といったことまでも含めて、踏み込んで確かめ合っていたように思います。その結果、言葉にできないような固い絆ができたと思います。

日本はやはり途方もなく豊かな国です。高層ビル、高級車や着飾った人々を毎日見かけました。ほとんど何もかもが高価ですが、ほとんどすべての日本人が目の玉が飛び出るような物価にも平気でやりすごしているようでした。けれども私のような外国人にとっては、ディスカウントストアの特価の値段でもまだまだ高いと思います。日本人の中にも同じ思いの人もあるようでした。

経済的な豊かさはさておき、日本は伝統や異国情緒に富んだ名所など文化的にも豊かです。国が発展し、車や電気製品や各種の電気通信機器などに溢れた近代的で複雑な社会となってもなお、工業発展のもたらす環境汚染など全く見られない庭園、山水が維持されているのは素晴らしいことです。

その一方で、日本中で未だに室内では靴を脱ぐ習慣が残っているのにも驚きました。はじめは不思議で面倒な気がしましたが、そのうちこれも、この国の言葉や行いの隅々までに徹底している丁寧さの現れなのだと思い至りました。この習慣のお陰で屋内は清潔なままでいられるようです。日本の家は私がこれまでに見たなかでもいちばんきちんと片付き、ピカピカに磨かれて輝いています。ここではホームシックになった外国人も慰められます。私たちフィリピン人ももてなしの厚いことでは知られていますが、日本の人々からこんなに歓待されるとは思いもよりませんでした。家族のぬくもりや、静寂を破るものと言えば時折の風や木の葉のそよぎばかりといった家々に、わが家のことが思い出され、それは不思議なことに、家が恋しくなるかわりに、よりくつろいだ気分になれました。

また一方では、西洋の影響は人々の隅々まで行き渡っているだろうと思っていました。東京のような大都会では、西洋風の様式が採り入れられていました。日本に実際来て見るまでは、日本女性がエキゾティックなドレスに身を包み、タバコを喫って一晩中パーティーをするなど思いもよりませんでした。私はあまりにも無知だったようです。けれども訪れた地方では、かつては有名だった日本女性の慎しさも、地元の女性のあいだにまだまだ健在のようでした。女性は夫たちや子供たちに優しく、慈しみ深く、よく尽くします。女性が社会でほとんど省みられていないのは本当に残念です。彼女たちは表に立つことはありません。どうも見たところ、男性が女性に対して偉そうにしているのは、重要な決定が男性によってなされる家庭内だけでなく、会社でもそうで、主要な地位はすべて男性が占めているようです。

個人的な感想を言えば、特に女性の社会的な地位に関しては、これから社会的な革命が必要ではないかと思われるほどに、日本はまだまだ発展の余地大と見受けました。

しかしながら、とりわけ日本の急速な発展への大いなる貢献に関しては、私は日本の男性を大いに尊敬しています。すべての日本人に言えることですが、熱心に働き、勤勉で、規律正しく、愛国心に富んでおり、自分も見習わなくてはという気にさせられます。彼らの特徴には何よりも感銘を受けました。そしてこの国を愛する心こそが日本の成功の原動力ではないでしょうか。私の見るところでは、彼らは資源・環境問題に真剣に取り組み、自国の製品を愛するところ大です。こうしたことは、国が発展していくために最も基本的で大切な要素だと思います。

総じていえば、私の日本での経験はこの国と人々に対する見方をすっかり変えてしまいました。いうまでもなく、旅をすることで、経験を広げ、見方を深めることができます。私は素晴らしい人々の素晴らしい国、日本を大いに体験し、再発見する機会に恵まれて幸せでした。もちろん、たとえば、「あの悪いやつらはどこへ行ってしまったのか」といったような、私の頭の中に残ったままの疑問もあります。私は日本で一人として悪い人に会わなかったのです。悪人がいたとしても、もう問題ではありません。結局、日本も現実の世界の一部なのですから。

日の昇る国でダンスして

デニス・ゼルナ・アンドレス
（農業グループ）

日本へようこそ！　マニラ発JAL742便が静かに成田空港に着陸した時、やさしい声がこだました。青年招へい事業のフィリピン農業グループ25人の到着である。到着ターミナルへ向かって廊下を歩いている時すでに、周りの美しさに感嘆してしまう。私たちすべてにとって日本にいるということは正に夢が現実になったということだからだ。

すぐに私たちは日本語と日本の生活スタイルにさらされる。日本語の勉強はかなりたいへんだ。が、結構おもしろいし楽しいものでもある。それにひきかえ、日本の文化、人々、産業、経済……これらを理解するということは、一つの大きな経験である。

オリエンテーションでは、このプログラムの本当の目的がよく理解、認識できた。

日本における農業関連産業、観光産業戦略の素晴らしさが、私たちが訪れた場所、日本人カウンターパートを通じて伝わってくる。特に、カウンターパートの方々とは言葉の壁を超えて理解し合えたと思う。

大分県での経験――地方活性化へ向けての県自治体の努力、ホームステイプログラムを通じての日本農業従事者との交流――は、日本の農業の現状への理解を深めてくれた。しかも、日本の農業従事者たちがこの混沌とした農業をめぐる数々の問題――食料輸入自由化、後継者問題――にぶつかりながらも、確固とした誇りを持って対応していることがよく分かってきた。

広島で私たちは戦争の悲惨さ、残虐さを改めて感じることができた。人類の共存と繁栄は、世界の本当の意味での平和にかかっていることに気づかされた。

このプログラムを通じて、単に一般的な日本を知るということ以上に、農業を発展させるための私たちの役割、世界平和と国際協力の促進の大切さを学ぶことができた。

このような機会を与えてくださった日本政府、JICA及びJICEに深く感謝したい。私たちが今ここから友情・交流、そして協力をより一層深めていくことを誓いたい。

日本の理解

ジョン・ヤマネ・アティラノ
(ASEAN混成 環境保全グループ)

私たちが日本で得た経験について私個人の考えをまとめるには、しばらくの時間を要した。書きたいことはたくさんあるが、まず最初に、自動化され、ロボット化された日本社会について述べたいと思う。ここでは時間の本質は素早く、そして瞬時である。地下鉄や新幹線の時間の正確さには、本当に感心させられた。ディズニーランドで乗物を待つ間、本当に日本では時間は貴重で〝時は金なり〟であり、日本の行動規範はこれに集約されていると思ったものである。

東京と北海道の釧路という日本の二つの側面を見られたことは、西洋の影響に支配された社会の変動を理解するのに役立ったのだが、これは若者の価値観に顕著に現れている。この現象は、日本だけではなく他の国でも起きていることだが、丹頂鶴に象徴される釧路市では、実に顕著である。私は個人的にホストファミリーとのあいだに温かい愛と思いやりの絆が育まれたと信じているし、かつ経験もした。

同様に、環境の保護及び保全に関する必要性は、日本人のライフスタイルのなかに非常に大きな影響力を持っている。環境に関する講義すべてを受けるまでもなく、その考え方は日本の至るところで観察することができる。

日本の豊かな資源を維持しようという試みには、歴史的遺産の保存も含まれている。

たとえば、伝統的和紙工芸から生け花、武道、弓道、お茶に至るまで。

たとえば、原始林、湿原から絶滅の危機に瀕しているマリモまでの保全の概念。

これらすべての経験から私たちは、私たちの環境を守っていくための概念と考え方を学んだ。

京都及び広島の見学では、平和と友情を永続させるために私たちそれぞれの努力を結びつける世界的な視野を身につけた。

最後に、ASEAN混成環境保全グループのメンバーは、日本での経験から常に力と刺激を得続けるであろうことを述べて、この感想文を締めくくりたいと思う。

どうもありがとうございました。

私の見た日本式ものごとのすすめ方

エマニュエル・サポルナ・バハ
(ASEAN混成 経済1グループ)

素晴らしい貴国への私たちの短い旅も今、終わりを告げる。冬に向かう日本の美しいイメージは、私の胸の中にいつまでも残るだろう。この20世紀の都市景観でさえ繊細な広重の絵のようだ。

私の個人的な考えや感じたことを発表することは私の喜びである。私自身の考えを述べられることは素晴らしく、またグループを代表してしゃべるのではないことも変化があってよいと感じる。私は街を自分自身で歩き回る喜びを感じながら、地下鉄のベルベットの椅子に感心した。これは日本がエレガントで清潔なことを強調している。しかし、輝かしいイメージは別としにして、日本はまたセレモニーに溢れている。デパートの受付嬢

は礼儀正しくお辞儀をし、食事の前には「いただきます」のあいさつ。これらは私に、日本のビジネスマンもまたセレモニーに則って仕事をすることを絶えず思い起こさせる。

時々これは西洋的なやり方をするビジネスマンにとり、フラストレーションになるのでは、と想像する。誰も率直に話をしない。何かが決定される前には、会議と何段階もの承認過程がある。私の国では、いくつかのビジネスは西洋式に行われる。しかし、時として東洋式で行われることもある。自分もまた東洋人でビジネスを専門職としていることを思い出すことは、私にとってはよいことである。こうしたやり方をすることは第三世界であることではない。なぜなら私たちの隣人である日本は、先進国でありながら独自のやり方を継続して行っている。

もし私が批評するとしたら、日本人のやり方はたいへん厳密で、組織的であるということである。そこには個人の成長や表現の余地はたいへん少ないように思われる。事実、若い人は、古い前例のある方法に従うようになっている。そしていくらか経験を積んだ後に、自分の見解を述べられるようになるのである。このようなやり方は私にとってはたいへん難しいことであるだろう。

しかし、専門職にある日本人には、私も取り入れたいと思うような素晴らしい特徴もまた見ることができる。それは忍耐力と耐久力である。あなたたちは黙って、我慢強く働く。あなたたちは長時間働き、土曜日すら働く。そこには〝沈黙の効率〟がある。言葉数は少なくとも、やることはやる。私たちもまた一生懸命働くが、よく遊びもする。

私はあなたたちにこの点を考えるよう勧める。というのも、私と同じ年の日本人参加青年の何人かは〝真面目すぎる〟ように見受けられたからである。年配の人には分別がある。若い人にもまたエネルギーと新しいアイデアがある。私は滞在中に与えられた温かい歓迎と同様の歓迎を皆様にできる機会を楽しみにしている。私はご一緒した皆様の何人かがいつの日にか訪ねて来てくれることを希望する。日本人はいつでも私の心の中の特別な場所にあるだろう。なぜなら、私はあなたたちとたいへん特別な方法で知り合えたから。このプログラムは私にあなたたちとの絆を促進してくれた。

サムリング　パグキキタ！
マブハイ！
アトマラミング　サラマトポ！
また会う日まで！
みなさんのご長寿を！
そしてありがとうございました！

■アジア

■シンガポール

ありがとうのしるし

シム・ンガ・イム
（教育グループ）

私は日本という国とそこに住む人々にいつも興味をもっていました。ですから、日本食や日本文学、美術などを積極的に求め歩いていました。しかし、私が今まで味わっていたものは日本もどきのものだったのです。日本に来て、やっと本当の日本を味わうことができました。日本に来てから改めて「温かさ」という言葉の意味を知りました。

お会いした日本の方々は皆とても優雅で言葉の壁などを感じさせない温かな人々でした。ホストファミリーの方々が何度も繰り返し和英辞典を引いてくださったことにより、私は皆さんと一緒に夕方のテレビを楽しむこともできましたし、また私の片言の日本語でも話が宙に浮いてしまうようなことはなかったのです。また、学校を訪ねた折、私にゲームを教えようとする多くの試みがやっと成功したと分かった時、子供たちが一斉に拍手をして喜んでくれました。これらの体験どれにも、私は言葉で言い表せないほど感動しました。この温かさは、茨城に滞在中にも十分に示されました。素晴らしく計画されたプログラムは、いかに私たちが快適に、安全に、楽しく過ごせるかが十分に考慮されたものでした。たとえば、同じ食事は二度となく、私たちを邪魔者と感じさせるような学校は一つもなく、また、おしゃれをしても、行くあてもないというような夕方は一夕もないほどに、いつもボランティアの方々がホテルのロビーで待っていてくださいました。

速度の速い生活スタイルが、結果としておざなりな親切を生み出すのではないことを知りました。そしてまた、もてなしというのはただ単に玄関のドアを開けたり、大きな微笑みをつくるということでもないのです。もてなしというのは、心の姿勢なのです。プログラム中、私たちがこのまま日本に滞在したいと一度ならず思ったのも無理もないことなのです。日本を離れるにあたり、私の好奇心は満たされましたが、私の心の一部はこのままここ日本に残ることも分かっています。

日出づる国の忘れることのない印象

カン・リン・イン・フローレンス
（社会開発グループ）

１カ月の日本滞在は発見の連続で、私たちの心に忘れることのできない思い出を残すものになった。日本のサービスがよいことと日本人が親切なことはいつも聞いていたことだが、今回私はそのことを身をもって体験した。私たちが滞在したホテルや、お土産を買った店では人々は皆とても礼儀正しく、お辞儀をして「どうもありがとうございます」と繰り返していた。たとえ私たちがその店で何も買わなくても、日本人はいつも笑顔で応対してくれた。

私に強い印象を与えたのは、大阪でのホームステイ中に受けた温かいもてなしだった。

私のホストファミリーは、藤原昌子さんの家族だったが、私を本当の家族の一員のように扱って

くれた。言葉の壁にもかかわらず、私たちはお互いの国の文化や食べ物についての情報を交換することができた。私にとってもう一つ印象深かったのは、ホストファミリーの家の「ハイテクトイレ」だった。違った役割を果たすたくさんのボタンがついていて使いこなすのに苦労した。でもとても楽しい経験だった。ホームステイは私に日本の家族の生活を知る上で全く新しい体験をさせてくれた。

分野別地方プログラムも貴重な体験となった。

神奈川で実施された合宿セミナーは日本人の若者と交流する機会を与えてくれた。ディスカッションでは日本社会の迷信、食べ物、ボランティア組織について話し合った。よみうりランドで私は初めてホワイトキャニオンローラーコースターに乗った。それはとても怖かったけれどスリルは満点だった。とにかく、私たちは日本の青年と忘れることのできない時を過ごした。

国会議事堂見学、大阪府庁・大阪市庁訪問は、私たちに日本の政治組織を理解する上で役立つものだった。

プログラムの最後は、奈良、京都の見学だった。私たちは神社、仏閣そして公園を訪れた。それは大都会東京の「ハイテク」とは対照的な、伝統的な日本の一面だった。そこにはもちろん、写真好きにとっては見逃せないたくさんの景色があり、伝統的土産品もあった。山や、色とりどりの野生の花や、田んぼの風景は息をのむほどだった。秋にはどんなに美しい風景となるのだろうか。

このプログラムで私は恋におちた。温かく誠実な人々と、近代的でありながら伝統を残した日本という国に。私は日本の文化、伝統についての理解を深め、新しい友人を得ることができた。日本を再び訪れる機会はないかもしれない。けれどこの思い出は一生ずっと私の胸に残るだろう。

20の表現

経済A1グループ合作
(経済A1グループ)

＊時刻表通りに1分も狂わずに来る地下鉄、かわいらしいこけし人形、きれいな盛りつけのお弁当、親愛なるホストファミリーと鳴子の人々。その他もろもろの思い出を、撮りまくった18本のフィルムとともにずっと大切にしたい。ここにグループを代表して、プログラムにかかわってくださった方々にお礼を申し上げる。

(ヘン：グループリーダー)

＊日本――高度で豊かな文化と伝統の国。
日本――私を魅惑する国。ずっと、ずっと。

(スワン)

＊1カ月の滞在は、とても実り多く楽しかった。日本の文化、言葉に触れただけでなく日本の生活を見つめることができた。 (イン)

＊このプログラムに携わった人々の数を考えたら圧倒されてしまった。ホストファミリーの寛大さと温かさには、感激。このプログラムの意義が世代を超えて引き継がれていくことを望む。

(ヨクユイ)

＊日本青年やホストファミリーとの交流を通じて、日本の文化や生活について理解を深めることができた。今度は違う季節に日本を訪れ、別な横顔を見てみたい。 (メイリン)

＊日本青年との交流や美しい景色を楽しんだ。特にホームステイはいちばん楽しく、印象的だ。滞在を通じて日本各地のさまざまな組織活動を知ることもできた。 (ウィーミン)

＊ホームステイで受けたホストファミリーの温かさは忘れられない。東京のファッション、渋谷のポップカルチャー、伝統的文化と先端技術が隣り合っている日本。 (デイビッド)

＊素晴らしい体験であり、日本の生活に対する

理解を深める場となった。特に、鳴子の皆さんの温かいおもてなしにお礼を申し上げたい。素晴らしいひとときをありがとう。またお会いできますように。（シュウビン）

＊心優しい鳴子の人々が示してくださった、思いやりと親近感を大切に胸にしまう。鳴子の町の魅力をさらに引き立てる良さが、人々の心に残るよう願う。（ベンキム）

＊ホームステイは電子辞書を使ってのコミュニケーションだったが楽しい思い出であった。鬼頭、そして山の水をくんでコーヒーをいれたことは忘れられない。（キェンギョプ）

＊原宿の巨大スクリーン、池袋の地下鉄とJRの迷路、鳴子での山のような刺し身、うだるような暑さの広島、込んでた京都、荷物に腰掛けての旅行、これが私の１カ月！（アンジェラ）

＊痛みなしでお風呂に入れると思ったら日本式のお風呂を試してごらん？　熱湯風呂または薬湯と言うのか……。きれいに身体を洗ってさあ入ろう……。あったかいなんてもんじゃない。で、湯船に入れない。まずは、お試しあれ。（エンチュン）

＊歩きながらまた地下鉄の中、都会の喧騒を見た。温かく迎えてくれた宮城県、いちばん思い出深い鳴子町のホームステイ。日本人の家庭で日本の文化と習慣を学んだ。（ソージン）

＊大地震、サリン、円高、そんな日本へどうして行くの？　１カ月滞在後やはり今回来てよかったと思った。日本は賑やかな東京、きれいな着物、おいしい寿司だけの国ではない。日本について多くのことを学んだ。特に楽しかった鳴子町、ホストファミリーに感謝。ぜひシンガポールに来てください。感謝の気持ちをお返ししたい。（ライイー）

＊日本人の思いやり深さ、日本人との交流、特にホームステイで受けた温かさが忘れられない思い出となった。（コクチュン）

＊ホームステイでの温かさと優しく迎えてくださった家族に心を動かされた。言葉を通じての意思疎通は難しかったが、私を気づかってくださる思いやりに感激した。広島では戦争の悲惨さと平和を守り抜く努力が世界を通して必要だと改めて思った。（ポーキョン）

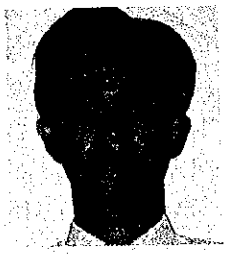
＊「ふるさととは心がとどまるところ」――この30日間で日本は私のふるさととなった。シンガポールに持ち帰る素敵な思い出をいつまでも大切にしたい。（ジューン）

＊日本の人々との交流は１カ月間延々と続いたが、それはとても充実し、かつ実り多いものだった。日本を知りたいと思う私たちの熱意は言葉の壁を越えていた。お会いした一人一人の方に心からお礼を申し上げたい。特に鳴子の皆さんに。超一流の、とびっきりのおもてなしをありがとう。このプログラムにかかわってくださったすべての人に、ヤァーーーム、セン（乾杯）!!!!

（ソーフン、テニー、ソックファ）

日本：その国と人々

ロー・チー・ケォン・ケルビン
（経済Ａ２グループ）



１カ月の日本滞在中に私たちはたくさんのことを実際に目にし、体験することができた。どんなことを目撃し、感じたのか、ここにそのすべてを記すことはできないが、多少なりとも私たちの日本と日本人に関する個人的な感想をまとめてみたい。

日本の地方は美しい。都市間の幹線道路をドライブしていると、緑の植樹地帯や林が連なる山々の山腹に地平線の彼方まで続く。クリスタルのよ

うな水が山肌を流れ落ちるのもしばしば見られる。六日町での合宿セミナー中にそのような自然に多々遭遇できたのは幸運であった。秋や春はより美しいのであろうことは容易に想像できる。

都会のなかで美しいところも発見した。福岡県の百地である。自然溢れる緑地帯、地下に埋没された電線など、素晴らしくデザインされたウォーターフロント計画地域である。他の都市にはない。この反対が東京であろう……茂り過ぎて不格好なコンクリートジャングルは生き残るために、もがいているようだ。

日本の社会の中には三つの最も印象的な特徴がある。まず一つ目は人々の勤勉さである。日本人が働き者で、いつでも与えられた仕事に一生懸命に取り組むことは言うまでもない。日本製の製品の質、量がともに秀でていて、産業面での競争力を保持しているのは、そのような礎によってであると私たちは思う。

二つ目は数多くの伝統と数多くの近代化、西洋化された習慣とのたいへん興味深い共存である。たとえば、普段すべての日本人が箸を使用し食事するのにもかかわらず、仕事場ではスーツを着るのが通例である。相撲について言えば、おそらく今も昔と同じように人気がある。また通常、そのような相撲のファンは同時に熱心な野球のファンでもある。そして、1868年の開国以降、職場でも広く西洋化が進められたにもかかわらず、日本独特の終身雇用制度は未だ慣行化している。しかしながら、同時に、多くの伝統的な慣習、美術、工芸は若い世代間では徐々に失われつつあると私たちには感じられたのも事実である。

最後の三つ目は、日本人がどれだけ礼儀正しいかということである。新聞にも「日本人は謝罪する国民である」という記事が書いてあった。通りやショッピングセンターを歩いている時、よく聞こえてくる三つの表現は「すみません」「ありがとう」「どういたしまして」だと言えるだろう。

日本滞在中、私たちはたくさんのことを学び、また非常に楽しく過ごすことができた。JICAにこのような経験をさせていただいたことを感謝したい。また日本でかかわったすべての方々に対して感謝の意を表したい。

日本：日は昇り続ける

ロー・タック・ワイ
（経済Bグループ）

私たちが日本に到着した頃、人々はまだ、1月の阪神大震災や地下鉄サリン事件のショックから立ち直れずにいました。日本の経済情勢もまた「バブル経済」がはじけた後の低い成長率、円の高騰、アメリカとの貿易摩擦の激化という寒風にさらされていました。巷では「日出づる国」が「日没の国」になりつつあるとの声も聞かれました。ですから私たちは、退廃し、将来に悲観的な国を目にするのだろうと考えていました。しかしそうではありませんでした。

日本人官僚、ビジネスマン、公務員との公式な交流においても、平均的な日本人との非公式な会話やディスカッションにおいても、私たちが会った日本人はみな、国の現在抱える諸問題を解決しようという決意に満ちていました。豊橋市で私たちは、「21世紀に向けて市の目指すべき方向」「日本全体の発展における市の位置づけ」について、市と住民が一致した明確なビジョンを持っていることに、強く印象づけられました。

日本人青年とのディスカッションでは、自らの将来像を明確に描きたいという熱意を感じました。

私たちが最も強く感じたのは、日本の将来のリーダーたる日本人青年の現実感です。日本の現在の諸問題を受け入れる一方で、なお状況に適応し、変化の必要性を受容する意欲と柔軟性を持っていました。さらに大切なことは、彼らが外国の考え方、提案を受け入れる姿勢を持っていたことです。私たちの日本滞在中、内向的で周囲の世界に門戸を閉ざしていた社会の痕跡を見ることはほとんどありませんでした。それどころか、私たちが会ったのは、他では見られないほどの温かさとホスピタリティに満ちた人々ばかりでした。

日本はその歴史の中で、さまざまな困難に上手に対処してきました。19世紀末には、それまでの孤立の代わりに、果敢にも近代化の道を選びました。第2次世界大戦後の荒廃のあと、劇的な復興を遂げ、世界経済のリーダーとなりました。今日、日本は新たな世界秩序のなかで、自らの新しい役割の模索という、これまでとは別の困難に直面しています。国民のエネルギー、忍耐力、柔軟性を以て、日本が今一度、檜舞台に登場し、現在の問題から脱却することを、私たちの世界は期待しているのです。

湖畔にて――ひとときの孤独

リム・ミン・フーン・モニカ
(ASEAN混成 社会福祉グループ)

松の木々は列をなし
空に手を掲げる歩哨のよう

はるかな地で
起こるマジック
季節のうつろいが
木の葉の色を変えるように

自然の静けさと
自然の音楽が
究極の調和の中で一つになる

魚の起こす泡沫が
さざ波を岸辺へと押し寄せる

孤独な漁師が
釣り糸を垂れ
うきが立たせるさざ波は
まるで自然のわざのよう

清冽な美しさ
声高なアヒルと
つがいの野鳥が
静寂の中で
湖を音もなく
泳ぎ渡っていく

太陽は雲から顔をのぞかせ
『やま』の色合いを鮮やかにする
その姿は静かな水面に映り
そして次に映すのは……

日の昇る国

ン・ピック・ヨン
(ASEAN混成 経済2グループ)

新大阪発東京行き、ひかり232の中で気持ちよくまどろんでいると、突然新幹線のような速さで、日本滞在中の生き生きとした思い出が頭をよぎった。複雑な思いにとらわれながら、私は時間を遡り、もう一度この忘れられない日々を送ってみたいと願っていた。

東京滞在中は退屈するということがなかった。この都会は常に活気でざわめいていた。六本木の華やかな夜から、新宿・歌舞伎町、銀座の粋で高級なショッピング街まで。

クモの巣のような交通網の地下鉄にぶらりと乗り込んだ私は、ほとんど日本語ができず、まるで迷子のようだった。日本人の迷子と違う点は、私が常にはっきりとした目的もなく通りを歩いていることだった。にもかかわらず、100円ショップを探すのは楽しかった。目の前をミニスカートにロングブーツの女の子や上着にネクタイの男性たちがきびきびと練り歩いていくのを楽しんだのは言うまでもないが。

窓から遠くを眺めると、赤や黄色の木の葉が見える。群馬を思い出した。合宿セミナーが行われた静かな場所だ。日本人青年との討論は実り多かった。一緒に過ごした短い時間に花開いた親しい友情関係を私は育み続けるだろう。日本の温泉、カラオケ、伝統舞踊も体験して楽しかった。

日本人青年と別れる直前、白根山に登る機会があった。とても寒かったが、息をのむような群馬の光景が眺められた。本当に楽しい体験だった。

プログラムのクライマックスは静岡で始まった。東京の南西に位置する県だ。

私の第一印象は、静岡は東京とかなり違っているということだった。静岡に足を踏み入れた瞬間、のどかな雰囲気があった。通りは混雑もなく、けむってもいず、人々はゆったりとした歩調で動きまわっていた。

静岡県の職員からこの美しい県のおおまかな説明を受けた。後にヤマハ発動機、浜松工業技術センター、富士養鱒場を見学して多くのことを学んだ。

やがて待ちに待った日がやってきた。ホストファミリーに会った時、私は不安と興奮の入りまじった気持ちだった。温かいもてなしを受け、私には決して忘れられない思い出となった。

静岡滞在も終わりに近づいて、富士山五合目に登った。静岡及び日本の壮大で有名な山を眺めるのを皆楽しみにしていた。また、着物を着たり、日本の伝統的な茶道や琴も体験した。私には目をみはるものだった。

日本の秋は壮観な眺めだ、特に宮島と京都。私はこの美しい季節に日本にこられてうれしく思った。

「……終点東京駅に到着いたしました……」

きれいに澄んだ声が突然私の耳に鳴り響き、私は現実に引き戻された。私の旅はほとんど終わりに近づいていた。日本人との友情や、日の昇る国への愛着に終わりはないと確信している……。

■アジア

■タ　イ

日本での30日の友情

ソンタヤー・セーンイアム
(教育グループ)

私はタイ総理府青少年局の知らせで、JICAとともに青年招へい事業の存在を知った。

タイの青年は皆、このプログラムに参加することに非常に強い関心をもっており、それは私も同じであった。青少年局とJICAの好意により、プログラムに参加したいという夢と期待が現実のものとなり、生まれて初めて日本を見ることができるということで、私たちは興奮していた。

私たちタイ青年47人は、教育グループ22人と社会開発グループ25人に分かれ、各々参加のための準備をしたが、出発する前のタイ国内にいる時から、コーディネーターによるさまざまな便宜を受けることができた。5月23日、日本航空718便でタイを出発、翌朝24日の6時半に成田空港に到着した。初めての日本で、初めて目にするものの数々に胸をわくわくさせていた。また、日本の関係者の人々による温かい心配りによって、さまざまな非常に興味深いプログラムに参加することができた。日本語授業にも楽しく参加することができ、基本的な会話を練習しながら日本人の生活様式やものの考え方、日本の現状などを知ることができた。さまざまなプログラムを通じて、日本がなぜここまで発展することができたのかということを理解できたと思う。ホテルメトロポリタンで行われた開講式はとても友好的な雰囲気であったし、武道館での武道鑑賞や江戸東京博物館など、東京の代表的な施設見学に非常に深い感銘を受けた。

東京を離れ岐阜に向かう時新幹線に乗った。生まれて初めて世界でいちばん速い電車に乗ることができとても興奮した。岐阜に着いて、市民の方々からの温かいもてなしを歓迎会やオリエンテーションで受けた。下呂で温泉に入ったのも印象深かったが、いちばん思い出に残ったのは世界青少年交流協会主催の合宿セミナーだった。3日間にわたって日本の人々と意見や経験を交換するうちに互いに友情を感じ合い、新しい友人を得ることができたと思う。特に最後のお別れパーティーの時に私たちの強い絆と友情を感じることができた。岐阜を離れて大阪へ向かったのだが、宿泊先のJICAの大阪国際センターはとても快適で皆満足した。いろいろなスポーツも楽しむことができた。京都では日本の古い美しい文化に接することができたし、商業の町として繁栄する大阪の町を見聞することもできた。そして、大阪を離れ、いよいよ重要なプログラムの待つ沼津へ向かった。

沼津に着いたとたん、私たちは特別な客として沼津国際交流協会の皆さんから温かい歓迎を受けることができた。ここでは、小学校から大学までの充実した教育に直接触れることができた。

そして、いよいよ皆が待っていたホームステイ・プログラムになった。ホストファミリーは3日間、私たちを本当の家族同様に温かく迎えてくれた。私たちの間には深い絆が生まれ、お互いの言葉や文化の違いも、何ら問題にも障害にも感じなくなっていた。私たちは全員、愛する家族を沼津に持つことができた喜びを感じ、沼津を離れる時は寂しくて涙が止まらなかった。

東京に戻ると評価会と歓送会が開かれた。今回のこの素晴らしい体験を、私たちは決して忘れることはないだろう。私たちは今、日本人に対して深い親しみと友情を感じている。この永遠の友情をもつことができたのもJICAのおかげであると思

う。いつの日かこの好意に報い応えられるようになりたいと思う。

日本人は本当にすてきですね

アナンヤー・ジアムスィーポン
（社会開発グループ）

日本は私たちにとって夢の国でした。ですから今回この1995年度青年招へい事業に参加できたことは、私たち社会開発グループ25人（男性10人、女性15人）全員にとってとてもうれしいことでした。

日本に来たことのない人、または日本人に会ったことのない人にとっては、日本人は自分たちのことしか、自国のことしか考えていない人々というイメージがあるかもしれません。でも私たちが日本に来て、日本人と親しく交わってみると、日本人はタイ人ととてもよく似た性質を持った国民であり、親切で思いやり深く、恥ずかしがり屋だということが分かりました。私たちが会った日本人は、１カ月間ずっと一緒にいたスタッフの人々、修善寺ユースホステルのペアレント、そして美山町のホストファミリーの皆さんも含めて、皆魅力的でした。それぞれ細かい内面は違っているのでしょうが、皆親切でいい人という点では例外なく、誰一人として私たちが愛さなかった人はいません。

青年招へい事業は、良い行いをした人へのご褒美のようなものだと言えるでしょう。１カ月のあいだ、ずっと宿泊、食事、歓迎、見学などすべて私たちにはいいことばかりでしたから。たとえば、東京に着いた最初の週はホテルメトロポリタンに泊まりましたが、都心にあり、とても便利なところで、食事もよく、近くに公園もあって私のグループの男性たちはすっかり気に入っていました。また修善寺のユースホステルでは、ペアレントご夫婦の親切にとても感激しました。タイ料理の本を見て、私たちの口に合うように料理を作ってくださったことは決して忘れられません。京都では京都ユース・ホステル協会の伊藤さんが毎日遅くまで面倒を見てくださり、本当のお父さんのようでした。

食事については、ほとんどが日本料理で、あまり食べられなかった青年や、体重が２、３kg減った青年もいましたが、大きな問題ではありませんでした。どの店でもいいものを出していただき、きっと高かったに違いないと思います。支給された滞在費により自分たちで注文して食べる機会もあったので、日本の食事が高いことはよく分かりました。最初の頃は缶ジュース１本110円もするのに驚き、負担に感じていましたが、長く日本にいるうちに1000円以下なら安いと感じるようになっていました。日本料理以外にも中国料理、西洋料理などもあり、特にタイ料理はとてもうれしかったです。

グループの団長として、グループの24人の青年たちに感激したことも付け加えたいと思います。特に時間どおりに動いてくれたこと。８時半に集合といえば時間ぴったりに集まってくれました。タイにいる時はほとんど毎回といっていいほど集合時間に遅れていたのに不思議なことです。コーディネーターがいつも集合時間を強調してくれたこともあったのでしょうが、日本人が時間に厳格なのを見て、グループ内でも時間に遅れる人がないように気をつけるようになりました。それ以外にもグループ全員愛すべき人ばかりでした。コーディネーターの言うこともよく聞いて、羽目を外すこともあまりなく、ほとんど言うことなしだったと思います。ただ健康面に関しては、このグル

ープは特に病人が多く出て、スタッフの皆さんにお世話をかけてしまったことにお礼とお詫びを申し上げます。

また、訪問したところはどこも美しいところばかりでした。どこへ行っても緑の樹木に囲まれていて、自然林ばかりではないとのことでしたが、とても自然に恵まれていると思いました。美しいところをいろいろと訪れることができただけでなく、日本の家族と一緒に過ごす機会を得られたこともたいへん幸せでした。どんな言葉を並べてもお礼を言い尽くすことはできません。日本で訪れた場所、日本で会った人々すべて、私たちが忘れることはないでしょう。

プログラムを終えて

パーニット・ヨットパンヤー
(農業グループ)

この青年招へい事業を担当する人々は、私たちタイ青年25人が、日本での1カ月の滞在に必要な事柄について知るために、事前準備の時間を用意してくれていた。

そして、ついに喜びと興奮の日がやって来た。それは外国への旅立ちである。ある者にとっては生まれて初めての経験であった。

成田空港に着いて以来、私たちほとんど皆が、〝日出づる国〟の繁栄を目の当たりにして興奮を抑えられなかった。空港からの道のり、宿泊ホテルまでの間、見るものすべてが新鮮であった。

日本の社会に実際に触れる前に、日本の経済、社会、芸術や文化などに対する非の打ちどころのないオリエンテーションプログラムが提供された。

体験的日本語学習で東京を案内してくれたボランティアは疲れることを知らず、タイ青年の日本語に対する知識を深めさせてくれた。受け入れ側は博物館見学や武道鑑賞にも連れて行ってくれた。

私たちが驚いたのは「日本青年団協議会」の団結力であった。今この地球のどこの国においても集団をまとめるということは難しい。

タイ農業グループにとって初めての日本の農業とのふれあいは、農協との交流であった。農協は、日本の農家の生活を支え、農業という職業についての誇りを農家の人々に持たせてきた。私たちが訪問した伊勢原農協は、長い歴史を持つ農協の一つである。タイ青年は野菜、果実、そして花卉を栽培している農家の人々との交流を持つことができた。私たちはたいへん満足し感激したのだが、その大きな理由は、私たちからの質問を受けた方が、それぞれ一生懸命に答えてくださる態度に感銘したからである。

地方へ出る前に私たちは日本青年との交流の機会を得た。その交流が行われた富士青少年センターは、山中湖という美しい湖の近くで、夢にまで見た富士山からもそう離れていなかった。環境もよく、皆がとても気に入った本当に意義のあるプログラムであった。

そしていよいよ10日間を過ごす東北の〝青森〟に足を踏み入れる日がやってきた。受け入れの皆さん方は、このプログラムを組むにあたって相当の時間を費やし、疲労も気苦労も多かったことと思う。しかし、私たちにとってはすべて楽しいことばかりで、見るものすべてが目新しかった。青森でのホームステイの少しの間、私たちは離れ離れにならなければならなかった。国も言語も違う家庭に預けられるのは、不安を感じずにはいられない。しかし、同じ人間同士である。終わってしまえば、2泊3日という期間はとても短い時間に感じられた。

青森を発つ前に、私たちタイ青年とホームステイ家族との心温まる歓送会が催された。この夜は日本の家族の皆さんとの最後の交流の機会である。お互いにそれぞれパフォーマンスを披露し合いながら打ち解けあった雰囲気で過ごした。

青森でのさまざまなプログラムを通して、私たちは非常に意味のある経験と知識を持つことができたと痛感している。

その翌朝、青森に別れを告げ大阪へ向かったのであるが、ある家族は青森の空港まで見送りに来て飛行機が見えなくなるまで見送ってくれた。

大阪では素晴らしい水族館に感激した。その水族館のすべての生き物の中の主役、主とも言える甚平鮫がいたからである。

大阪から美しい京都の町に入った。戦争中、アメリカは日本の古都である京都の価値を知っていたので爆撃しなかったのだという話を聞いた。もしアメリカが原爆を京都に投下していたら、全世界の人々はアメリカを許さなかったであろう。それほどに京の街には美しい価値のあるものが溢れている。

京都での翌朝、私たちは美しい女性の着物ショーを見学した。そこは伝統工芸が溢れる中心地である。私たちは素敵な伝統工芸品を目の当たりにして、思わず買い物に夢中になってしまった。

その後、私たちは寺院を3カ所見学し、とても心が安らいだ。京都の寺院は歴史的価値があり、訪れる人も後を絶たず、私たちはこんなことを話し合った。

「京都を見ぬ者、日本に来たと語ることなかれ」

京都を出発後、新幹線に乗った。広島まで行くのだが、まだ誰も新幹線に乗ったことがなかった。約2時間の旅だったが、全員が興奮し、また同時に幸せでもあった。

広島は、私たち全員が訪れたいと思っていた場所だった。一度に20万人の市民が犠牲になったという人類史上類を見ない被害に対して、私たちの関心はいやが上にも高まった。

よく晴れた次の日の朝、私たちは爆心地にある原爆資料館と平和記念公園を訪れた。50年という月日が流れているにもかかわらず、私たちは大きな悲しみに包まれた。この平和記念公園が作られてから、この事実を風化させないために、既に4200万人もの人々がここを訪れたという話を聞いた。このことは私たち人間が、戦争や死よりも平和をどんなに強く望んでいるかということを示しているのだと思う。

その後、私たちは東京へ再び戻り、いよいよ帰国する日が近づいてきた。皆、自分の子供たちや恋人がたまらなく懐かしくなってきていた。

日本を訪れたタイ青年のグループは小さなものだが、このプログラムを通して築き上げたこのプログラムの目的でもある平和や自由、友情の絆は決して無に帰することはない。タイ青年だけではなく、どの国の青年の意識も皆同じであろう。

私たちの心に残った思い出は、いつまでも決して消えることがないだろう。

日本とタイの深い友情

ピヤチャット・プローップローン
（経済Aグループ）

この青年招へい事業に参加し来日するにあたって、私たち参加青年20人は日本人と交流できるということにたいへん興奮し、喜んでいました。が、その時点でまだ、日本人に対してはっきりとしたイメージがありませんでした。日本に来てみて、ずっと私たちの面倒をみたり、いろいろなことに

気を配ってくれたコーディネーター3人や、温かく歓迎し友好を築いてくれたホームステイでの日本人家庭などに、私たちは全員とても感銘を受け、日本人が示してくれた友情に深く感謝しています。このことは、この事業の成功というだけでなく、これからの日タイ両国にとっても意義のあることだと思います。

日本で過ごした約1カ月の間ずっと、3人のコーディネーターはあらゆる面で私たちのお世話をしてくれました。宿泊、移動、食事、そして見学や訪問などがすべてスムーズに運んだのはもちろん、通訳や説明をしてくれることで言葉の壁を取り払ってもくれました。何人か体調を崩した人もいましたが、コーディネーターのお世話ですぐ元気を取り戻すことができました。このようなサポートのおかげで、今回のプログラムを通して私たちは心身ともに快適に過ごすことができ、楽しく有意義な経験を得ることができたのだと思います。

ホームステイも同じです。短い時間だったにもかかわらず結ばれた日本とタイの深い友情は、私たち全員の心の奥深くに刻み込まれ、誰もが別れ難い思いでホストファミリーの家をあとにしました。

9月21日に日本を離れなければならないのはとても残念ですが、私たちは皆、今回のプログラムで日タイ両方の参加者に育まれた絆、感激、感謝の気持ち、そして友好・友情を、いつまでも大切に持ち続けていくことをそれぞれの心に誓っています。

日本での感動

ジェサダー・パンサイシー
(経済Bグループ)

今回の青年招へい事業への参加は、他のどんな目的の旅行よりも意義のあるものであったことを信じている。一生のうちでもいちばん大切な経験の一つとも言えるだろう。

日本というとまず経済、技術を問わず、たいへん発達した国というイメージがあった。実際に日本に来てみると、想像どおりの発展ぶりであったし、想像以上に発展した国の様子を目の当たりにした。

日本に着いてからの講義は、私たちタイ青年の日本の経済、社会、文化、そして日本人に対する理解を深める上で大いに役立った。また、日本人の価値観、すべてにおいて規律正しい様子を見て、どうして日本がこんなに早急に発達したのかが分かった気がした。

江戸東京博物館の見学と武道鑑賞では、日本の歴史、文化、芸術を肌で感じながら理解させてくれた。見学旅行での寺院の訪問も、日本の政府が外国人に日本の芸術、文化に触れさせるために誠意を尽くしてこのプログラムを進めているのだと感じさせてくれた。日本人の良い点として、自国の文化を大切に守り続けていることが挙げられる。目にすれば、その美しさのあまり、称賛せずにはいられない着物の着用がその一つである。

日本の会社・工場見学を通して、日本企業の方針が、社員の能力開発、技術開発、あるいは製品の品質にまで及んでいることを学び、日本人の自

分の能力をフル活用して仕事している様子、社員の誰もが仕事に関する意見を職場で自由に言う機会が与えられている様子を垣間見ることで、日本の発展の理由を再認識させられた。

私が生涯決して忘れることができないプログラムとしてホームステイがある。私を受け入れてくれた家族（特に私の弟とも言える息子さん）の歓迎には心を打たれた。私を迎えるために、お母さんはタイ語を書いて歓迎の意を表してくれた。また、滞在中は、朝起きてから夜寝るまで私が家族で最も大切に扱われているのが伝わってきた。この家族との交流はホームステイが終わってからも尽きることがなく、他の参加青年にもそれぞれに家族からの連絡が入っていたようである。私自身も、毎晩息子さんから電話をもらった。日本の家族との交流はタイに帰ってからも続けるつもりでいるし、いつの日か私たち青年がタイで日本の家族を受け入れる日が来ることを望んでいる。その日が来たら、本当にうれしく思うだろう。

最後になるが、私たちの今回の日本でのプログラム実現に際して忘れてはならないのが3人のコーディネーターをはじめとする、愛知県関係者の皆様、見学先の官庁、企業、団体の方々の心配りである。青年招へい事業のプログラムは終わってしまうが、私たちの日本での感動はいつまでも尽きることがないであろう。

フィーリング

メイ・チャワナクナゴーン
（ASEAN混成 保健医療グループ）

幸運が私たちを一つの輪にする機会を与えてくれた。各国は、それぞれの特性、習慣、考え方を持っている。この集まりで、私は素晴らしい時を過ごした。どのようによい考え方を選ぶか、またそれぞれの弱点の見方をたくさん学んだ。これは私たちを〝兄弟〟にした。

世界の人々を木として見た時、それぞれの葉はそれぞれの心を表し、枝は国々、宗教の違いを表す。まるで平和と幸福の花開く木々を育てるように。

いろいろな育て方を学んだ……
真実に基づいた調和の種の植え方。
愛と喜びの水のシャワー、
心配りと支えの肥料の与え方。
忍耐と許容の土壌を耕し、
誤りと弱さの葉の摘み方。

そして静かに見つめていると……この特別な木は自由と平和、そして幸福の中でもっと美しく大きくなるだろう。

皆様本当にどうもありがとうございました。JICA、国際看護交流協会、JICE、その他協力してくださった方々、そしてホストファミリーの方々。私たちが学んでいる時休みなく太陽のように照らしてくれた皆様。努力と活力。私たちは、何もお返しできませんが、この青年招へい事業を通して

学んだことを皆様と同じように21世紀に向かって広めていきたいと思う。

ありがとうございました。

友情を通じての平和

タイ参加者グループ合作
(ASEAN混成 経済3グループ)

「〝目には目を〟は、人を盲目にする」

原爆ドーム、平和の灯、原爆の子の像、原爆慰霊碑、平和記念資料館は、広島のシンボルです。JICAの青年招へい事業により日本国政府より招待された他のASEAN諸国の青年たちと一緒に、私たちが見学旅行の一環として広島平和記念公園と資料館を訪れたのは、1995年11月16日のことでした。引き裂かれた衣服、灰と化した体、生まれることのできなかった子供たち……を見た時の私たちの最初の反応、それは憐れみでした。そうです、戦争のせいなのです。国の指導者によって、大国によって起こされた戦争、女性でもなく、青年たちでもなく、お年寄りによってでもなく、起こされた戦争なのです。にもかかわらず、これらの人々は戦争の犠牲者となってしまいました。

他国への参戦と戦争犯罪により日本が原爆を投下されたのは当然だという議論があります。

「目には目を、歯には歯を」ということわざがあります。しかしこれでは、人々や、家族や、国家の間の違いや対立を深めるばかりです。このことわざは、人々を盲目にしてしまいます。広島に設けられたこの歴史的建造物は、広くメッセージを伝えています。そのメッセージとは「平和」です。大きな戦争のなかったこの50年間、平和を世界の人々と分かち合ってきました。日本はその役割として世界に向けてそのメッセージを伝え続けています。友情を通じての平和、これは、私たちがJICAの青年招へい事業から学んだことの一つです。タイからの青年招へい事業への参加者の一人として、日本のみならずASEAN各国の文化を理解することを学びました。友情を通じての平和への努力は多分簡単でしょう。私たちはそれぞれ違う言葉を話したり、違うものを食べたりしています。しかし、少なくとも私たちは皆、文化の違い、価値観の違いからくる溝を越える架け橋となろうという同じ目的をもっています。友情とは平和への単純な一歩かもしれません。しかし、日本から、またブルネイ、インドネシア、マレイシア、フィリピン、シンガポール、そしてタイからの小さな一歩一歩が、結果的には平和への大きな道、友情から平和への道に続いていくのです。

世界へ向けて核兵器の廃絶と恒久平和を訴えていきましょう。

■アジア

■バングラデシュ

日本での生活

公務員グループ合作
(公務員グループ)

日本政府ならびにJICAによる青年招へい事業は私たちの人生における記念すべき出来事となりました。他のアジアの国々とともに、私たち20人のバングラデシュ公務員は1995年6月28日から7月27日の間、日本のさまざまな土地を訪れる機会を得ることができました。

高層ビル群、発達した通信システム、山岳地帯におけるパノラマのような自然の美しさ、太平洋に浮かぶ新空港、空港を結ぶ橋、立体交差や地下鉄など、多くの素晴らしいものを見ることができました。

短期間のうちに日本がこのようにさまざまな分野で発展を遂げることができたのは、人類史上の奇跡といえるでしょう。しかし、日本はただ単に経済的発展を遂げたのではなく、そのライフスタイルのなかに時間を厳守すること、誠実さ、規律正しさを取り入れたのでした。

日本はまた緑の豊かな国、きれいな道路や橋、そして都会と地方の生活に変わりのない国でもあります。

私たちは、世界的に有名な武道、ボウリング、その他いろいろな文化的活動に参加することができ、たいへん楽しみました。

また日本滞在中は心温まるおもてなしを受け、まるで自分の国にいるようでした。

私たちはバングラデシュに、このような温かい思い出を持ち帰ります。この思い出は私たちの心の中で決して色あせることはないでしょう。

このプログラムにかかわられたすべての方々に心よりお礼申し上げます。

■アジア

■ブータン

日本が大好きです!

ソナム・ザンモ
(教員グループ)

成田国際空港へ降り立った時、私たちは興奮とうれしさと不安のまじった複雑な心境だった。私たちはどのように迎えられるのだろう？　しかし、ホテルメトロポリタンに着いて私たちのコーディネーターであるマリコさんとルツコさんに会った時、その不安は消え去った。最初の2週間はオリエンテーションプログラムが行われ、日本語を学んだり、プログラムにかかわっている担当者に会った。

その後、富士山のふもとで行われたプログラムはおもしろかった。それは「合宿セミナー」と呼ばれた。ここで私たちは10人の日本人の青年ボランティアに会った。私たちは彼らと部屋を共にしただけではなく、彼らの伝統や習慣、文化的価値観を分かち合った。ここで過ごした2日間は、ただただ素晴らしいものだった。夜通しゲームや歌、討議で熱狂の時を過ごした。グループを共にしたモルディヴの青年と私たちは、私たちの伝統的な歌や踊りを披露して、それを皆で楽しんだ。

私たちはここで、横沢さん、堀添さんというとてもおもしろい人たちと出会った。特に堀添さんは私の30年の人生で出会った人たちのなかで最もおもしろく魅力的な人の一人だった！　京都では彼の誕生日をお祝いしたのだが、彼はそれが20歳の誕生日であると言った（彼の2番目の息子さん

は23歳である!?)。彼は日本の伝統的踊りに加え、彼が「ホリ・チャ・チャ」と呼ぶスペシャルナンバーを教えてくれた。

また、私たちは「日本式のおふろ」も楽しんだ。その後沖縄を訪問した。ここで最もおもしろかったプログラムはホームステイであった。私たちのグループのなかには英語をまったく話さない家族の家に滞在した人もいた。だからJICAから配られた「にほんご21」はたいへん役に立ったのだ。沖縄の生活習慣は本土とはかなり異なる。私たちは沖縄の民謡や踊りを紹介してもらった。また私たちは沖縄県副知事や教育長を表敬した。また盲学校を始め学校訪問はたいへん興味深いものだった。

最後に、このプログラムは私たちにとってたいへん有益で教育的だったことを述べたい。この素晴らしい機会を与えてくださった関係機関、JICAにたいへん感謝している。私たちはその後、京都、大阪への短い滞在を経て東京へ戻った。日本への旅は束の間の甘く美しい夢のようだった。

■アジア

■インド

日本—夢の実現

ニシャーント・ジェイン
(青年指導者グループ)

人にはそれぞれの夢があるが、成田空港に降り立った時、私の野心的な夢の一つは実現した。目の前に新しい世界が広がっていた。

東京での1週間にわたる「共通プログラム」はとても役立つものであり、かつ、楽しいものであった。日本経済、文化、生活等の日本社会のさまざまな面を知ることができた。この期間に学んだことのなかでもう一つ重要だったことは日本語であり、その教え方が素晴らしく、何の問題もなく学ぶことができた。わずかな日本語の知識であっても、日本滞在中の大きな助けとなった。私が日本語を話すと必ずみんな喜んでくれたので、日本語を話す機会に困ることはなかった。

滞在中の最も忘れ難く楽しかった思い出は、東京と比較すると小さな街の岡崎でのことである。そこには、話に聞いていただけの日本の自然と伝統美が目の前にあった。しかし、いちばん愛すべきかつ称賛に値するのは、岡崎の人々である。2日間のホームステイ、2日間の合宿セミナーの間に人々から受けた愛と心遣いを忘れることはできない。たった2日間のホームステイの間にホストファミリーと深く心を通わすことができ、別れが来た時はお互いに涙を流していた。

グループのメンバーと一緒に大企業のソニーや日本電装を訪問し、そこで見たものは驚くべきハ